
災厄の生き様

火憐ちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

災厄の生き様

【Nコード】

N5315X

【作者名】

火憐ちゃん

【あらすじ】

災厄の子として生まれた赤ん坊
そんな男の子が徐々にぶち壊れていく（アホの意味で）物語
きっかけは一人の女の子

バトルあり！！笑いは…置いといて、感動…も置いといて
作者の頭が弱いのでそこら辺は無理です♪

ハチャメチャ魔王な物語第二の

いや、第ゼロの物語！！

ハチャメチャ魔王からの方はこれがどうなったらあなるんだ？と
災厄の生き様からの方はハチャメチャ魔王は一先ず置いておきこい
つがこう爆発するとどうなるのかと楽しんで見てください♪

はじめに（前書き）

はじまりはじまり

はじめに

それは遠い昔のことである

魔界という魔法の世界

その魔界の一部地域のことである

古よりの言い伝えでその身に災厄を宿すと言われる子がある夫婦の間に授かった

一族全員から

恨み

妬み

全ての負の感情を産まれてすらいらない胎児に送り続けた

親である夫妻ですら恨み妬まれ胎児は育つ

本来であれば普通の子供として生まれるはずであったその胎児

人の想いは強すぎた

やがてその胎児は意思を持った

負の感情を受け続けその存在が変質した

そうただの子供として生まれるはずであった胎児が災厄をその身に

宿し、正真正銘の災厄の子として変質した

そしてその胎児は災厄を一手に引き受けて産まれてすぐに殺される
はずであつた

しかし、産まれてすぐの赤ん坊一人殺せずにその一族は全員虐殺さ
れた

その赤ん坊は産まれて泣くのではなく笑いながら

災厄の子としてその名の通りに1, 000を超える一族全員が炎に
よって殺された

これはそんな災厄の子の物語

最悪で災厄な子供の物語

災厄と化物（前書き）

災厄と化物

二人は出会います

災厄と化物

災厄の子が生まれて5年

少年は元気に育っていた

「あは…あはははは！！」

「ぶち殺してやる！」

そう元気に殺し合いをしていた

相手は13人の大の大人

有り体に言えば盗賊に位置する者達

しかし殺し合いという表現には語弊があった

盗賊の一人が武器を構えて少年に突撃する前にその首は胴体と分かれていた

首を力で木の実でも摘み取るようにもぎ取った

これで18人目

この盗賊グループは元々30人の大盗賊団であったがただの五歳の子供に手も足もでずにただ虐殺されていた

「あはははは！！殺す殺す殺す殺す殺す殺す！！」

少年は掴んでいた生首を強引に二つに割る

当然卵のように脳が現れ少年はそれを千切り口に入れる

「狂ってやがる…」

ニィ…とその言葉に反応するように狂ったような笑みを浮かべる

「あは…」

《炎舞》

少年の手から炎が吹き出る

災厄の存在として生まれた時から使える炎の魔法

「魔法…使い…!!」

盗賊達に焦りが生まれる

魔法使いは人間としての器に納まらない

超越した存在である

「狼狽えんじゃねえ!!」

《アイアンブレス》

一際身体が大きい盗賊

この盗賊団のボスである存在

ボスである彼も魔法使いである

怒号と共に口から鉄の破片が幾重にも現れて少年に襲い掛かる

一つ一つが直撃すれば一撃で五歳の小さな身体を粉々にするのであろう大きさ

ブレスとして広範囲に拡がり少年に逃げるスペースは無い

「あははは!!」

《炎舞》

笑い声と共に巨大な赤い火柱が少年の目の前に現れる

「な…!!?」

ボスの放った鉄の破片は全て火柱に溶けて消える

あまりにも違いすぎる魔法の威力

「逃げるぞ!! こいつただのガキじゃねえ!! 災厄だ!!」

「あははは!!」

火柱の中から狂ったような笑い声

盗賊達は一瞬で恐怖に包まれた

背中を向けて不格好でも無様でも関係なく全力で逃げようとした瞬間

《炎舞》

火柱が崩れ炎の雪崩となって盗賊達に襲い掛かる

「くそがあ!!」

《アイアンブレス》

ボスである盗賊は全魔力を開放

打ち勝たなくとも逃げるために相殺すればいいと考えた一撃

巨大な岩石のような鉄の塊を放つ

巨大な鉄の塊ならば自身の身体も隠せて、炎からも守る壁として最良だったが災厄には通じない

鉄の塊が一瞬で消え去った

相殺なんて自惚れを完全に打ち碎いたと同時に炎が盗賊達全員を包み込んだ

辺りには焼け野原のみが残った

少年を産んでしまった一族は遺跡の守人と呼ばれて盗賊達に恐れられていた

広大な森の中に100を越える遺跡がある

それは過去の魔法使い達が作ったと言われる遺跡

金銀財宝は勿論のこと、魔法の道具や遺産と呼ばれる魔法が使えるようになる道具等が眠っている

しかし少年を産んだ一族はそれを守るために遺跡を囲むように暮らして盗賊達は近づくことができなかった

しかし五年前一人の生き残りすらおらず滅びを迎えた

こぞって盗賊達は遺跡の宝を目指した

そして少年は五年間ずっと餌がやってくるその森に住んでいた

趣味は遺跡攻略

遺跡を攻略して宝を入手することで盗賊達はその宝を入手しようとしてやってくる

餌が向こうからやって来るのだ

遺跡には幾重もの人為的な罠や自然的な罠があり侵入を拒む

規模と罠と宝によってランクで分けられていて、Sが最高、Cが最低のランクで四つある

見分け方は簡単だ

自然的な罠があればAクラス以上

自然的な罠が無ければBクラス以下

自然的な罠は宝に宿る魔力が漏れでて長い時間をかけて存在が変質したものである

それだけ大きな魔力をもつ宝が眠っている

少年が狙っているのはAクラス以上

理由はお宝が希少価値があるため狙われやすい

少年の首には盗賊達の中で懸賞金がかけられている

賞金は10億

一生遊んで暮らせる額である

「暇…だ」

殺し尽くすと暇になってしまい少年はその場に倒れるように寝る

これは普通に寝るよりも餌がやってくるためだ

知恵をつけていた

「あら？こんなところに子供がいるわね」

背後

というよりも倒れているので足の先

気配が現れた

「!!?」

声をかけられるまで気付かなかった少年

反転しながら飛び起きる

「なんだ…お前…?」

少年と対峙しているのも少女だった

黒髪を着物を着た少女

外見は少年より少し歳上の八歳程の少女

「ふふ…私?…私は静紅よ。あなたは?」

「あは!!」

《炎舞》

少年は笑うと静紅に向かって炎の槍を投げつける

「ひえ…!!?」

《完全領域》

しかし少年が放った槍は静紅の薄透明色の防御壁に防ぎきられた

「あはははは!!」

防ぎきられた

初めて攻撃を止められた

それは少年の中で初めての経験で心の底から笑いが込み上げる

「びびびビックリしたわああ!!?」

しかしその少女はその場に座り込んでいた

腰が抜けたのだ

「私は名前を尋ねてるのだけど…聞く耳持ってくれないし…」

次々と放たれる赤い槍

全ての攻撃を防ぎきる

「あは!!」

狂ったような笑み

「まあ…こんなところに子供がいるってことは災厄で最悪の子供よね…」

「あは！！」

頷くように笑う

「面白いなお前！！」

「会話フェイズ入ったの？」

手を休める少年

ギラギラと刺すような殺気が消えていく

「私は静紅、盗賊よ、この近くにあるSランクの遺跡のお宝が欲しいのだけど手伝ってくれないかしら？」

「…もっと殺し合え」

「…」

会話が通じない

言葉は理解しているが我が強すぎるのだ

「それで名前は…？」

「名前？」

会話は繋がったが首をかしげる少年

「名前を持ってないの？呼び名よ、えゝ個人を特定する記号みたいな」

「知らん、殺し合え」

二言目にはそればかり

溜め息を吐く静紅

「じゃああなたって勝手に呼ぶわ、あなたは災厄の子よね？」

「そう呼ばれる。それが名前がいい」

ときとうである

即決でときとうである

「名前は大事なものよ？もつとよく考えて決めなさい」

笑顔の静紅

（私…お姉さんっぽいわ！！）

盗賊である静紅だが外見が子供であるため、獲物と見られることは多いがお姉さんのように接することができるのはこれが初めてである

「ふうん…そんなもんなのか…」

少年自身も初めての会話

敵意も殺意も感じない会話に戸惑いながらも接する

「そんなもんなのよ…」

微笑む静紅

同時に静紅と少年はある一点を見る

「おい…」

「わかってるわ…」

200メートル先

哀れな餌を発見した

森で視界には捉えていないが気配は感じている

「そういえば…遺跡攻略一緒に手伝ってくれるの?」

「…いい、お前面白い…殺せないし」

会話をしたことがない少年

少したどたどしいがはっきりと肯定した

「いいわ…契約成立ね、相手の数はわかるかしら?」

「殺すぞ…20」

200メートルの範囲

少年にとっては見ているのと同じである

「私があなたに期待してるのは…あなたなら巻き込まれても死なないからよ…死なないでね」

妖艶に微笑む静紅

魔力が解放される

「殺す…か？」

同じように魔力を高める少年

僅かに殺気が放たれる

「あらあら…」

静紅は微笑みながら同じように僅かに殺気を放つ

そして、同時に動き200メートルの距離を一瞬で詰める

『な…!!』

盗賊達にとってはいきなり現れたように見えて

「あはははは!!」

その瞬間には一人が少年によって真っ二つに身体がちぎられた

「ふふ…」

そして違う一人も上半身が手刀で爆散された

「あは…あはは…あはははは…!!」

血を浴びて

身体をちぎった感覚を感じて

声にならない悲鳴を聞いて

絶望した表情を見て

そして気持ちよい程の殺意と敵意を向けられ少年は心の底から楽しくなってくる

笑いが止まらない

「あは!! 殺す殺す殺す殺す!! 全員殺す!! あはははは!!」

「あらあら…楽しそうね…ふふ」

盗賊達は構えるまでに身体を布のようにちぎられ

身体が爆散し

構えた時には残るは二人だけとなった

「この化物があ!!?」

恐怖で顔を歪ませながら盗賊は叫びながら玉砕覚悟で突撃する

しかし叫んだ言葉

「あは…!!!?」

少年が笑いながら殺そうとした瞬間

背筋が凍った

少年は本能のままに全力で空に跳躍

「ふふ…ふふふ…ふふふ…今、何て言ったの…」

魔力が爆発したように解放される

同時にそれだけで殺せるような膨大な殺気が放たれる

魔力の解放により二人の盗賊は吹き飛ばされ木に激突

「私は静紅…化物なんかじゃ…ない!!」

力が込められた手刀一線

巨大な衝撃波が放たれて木々と共に盗賊二人を跡形もなく消し飛ばす

「あは…あははははは!!!!」

それを上空から見た少年は笑う

自分よりも強い存在

同じように魔力を全開放

向けられた殺気に静紅は反応

「…あなたも殺すわよ」

冷たい目

そして強大な殺気

災厄として望まれず生まれた少年と
化物として望まれず生まれた少女

似たような境遇に生まれ育った二人の殺し合いは二人が力尽きて倒れるまで続いた

この出会いはこれからの少年にはとても重要で原点であった

災厄と化物（後書き）

名前 無し

種族 災厄の子供

所属 遺跡の盗賊

武器 なし

魔法 炎舞

人の想いによって災厄となった少年

眼に入っものは皆殺し

殺すことが何よりの喜び

ただ常時敵意と殺意を受けていたため、敵意や殺意をもたないものには違和感を感じてしまう

近距離が得意な間合いで引き裂くことやちぎることが大好き

キレるスイッチ 無し

力 A+

器用 A

魔力 S

魔法 A

素早さ A

近距離 A++

中距離 B

遠距離 B

初めての恐怖（前書き）

盗賊の少女の静紅とSランクの遺跡に向かう少年

そこで待ち受ける恐怖とは…

初めての恐怖

災厄と化物の壮絶な殺し合いから三日間

ずっと気絶していた少年と静紅

誰からも襲われなかったのは奇跡に近いのではなく

襲ってきたが寝ていても充分殺せるレベルしかいなかったためである

幸いにも腕がちぎれることもなく

内臓破裂や複雑骨折程度の怪我ですんでいて、三日寝れば代々身体は動くようになった

災厄と化物としての再生力の賜物である

「んゝよく寝たわゝ」

大きく伸びをする静紅

「…」

少年は身体を軽く動かし状態を確認する

「ふふ…私の予想通り死ななかったわね」

微笑みを浮かべる静紅

少年にとっても自分より強い存在は初めてで

静紅にとっても互角に戦える存在は初めてである

静紅の場合は孤独が癒えた

同属を見つけて内心も表情も喜びを隠せない

「殺し合い…殺せなかったのは最初だ」

「最初って言うよりも初めてって言った方が適当よ？」

どうしても少年の話し言葉は盗賊達のを聞いたりして覚えているためおかしい

「まあ…いいわ…それよりも遺跡」

スキップでもしそうな静紅

傷も大体は癒えたため、目的の遺跡に向かう

「逆」

少年はこの遺跡の森で五年間過ごしてきた

遺跡の大体の箇所はわかっている

静紅が向かおうとした方向と目的の遺跡がある方向は真逆であった

「…」

ピタリと足が止まる静紅

「や…やゝねゝ試したのよゝ」

歳上のお姉さんとして不甲斐ないところは見せたくない静紅

少しの冷や汗と強がりと言って反転し

「あら…!?」

着物の裾を踏んづけた

ぐらりと揺れる静紅

簡単にいえばずっこける静紅

「へぶ!!!?」

そのまま木に頭から激突

鈍い音が響く

若木とはいえ20年は経っているものをただそれだけでへし折る

ゆっくりと倒れる若木

「…」

「…や…ちょっとしか触っていないのに折れるなんて…この木が弱

いのよ!!」

歳上のお姉さんとして威厳が崩れた

もともと少年は感じていなかったが静紅はなんとか誤魔化そうとする

「いやほら…あれよあれ!! こんなところに罠があるとは思ってなかったのよ!!」

罠も何も自分で自分の裾を踏んづけただけである

「ほらあなたもそう思わ…いないわ!!」

少年は静紅が転けても言い訳を連発しても気にせずに遺跡へ進んでいた

静紅は急いで追い付こうとする

幸いにも少年は普通に歩いていたのですぐ追い付けた

「先に行くなんてひどぶ!!」

追い付けた途端に凄まじい勢いで転ける

少年にぶつかる勢いだが少年は背後からの足下に目掛けて放たれた突進を少しだけ跳躍して避ける

「…」

進行方向を塞がれた少年は顔面からスライディングして倒れている

静紅を避けて進もうとする

「ふわあああん！！もういやああ！！」

起き上がり泣き始めた静紅

しかし少年は無反応

「ちょっとは気にかけてよお！！」

駄々をこねる子供のように静紅は腕を振り回す

「！！？」

当然ただの子供とは次元が違う静紅のそれは衝撃波となって少年に襲い掛かる

転がるように避ける少年

「殺る気…か？」

臨戦態勢へと移行する少年

「殺る殺らないじゃなくて気にかけてよお！！」

理不尽であった

「…」

少年は臨戦態勢を解く

「お前を気にかける意味が…ある…か？」

理不尽に対して少年がとった行動は正論である

少年よりも強い実力を持つ静紅が転けてもダメージは無い

何度もアホのようにずっとこけるといふ精神的なダメージはあるが少年には理解ができない

しかし、少年の言い方では

お前程度気にかける存在ではないわ！！このゴミ虫が

と静紅には捉えられた

「ふ…ふわあああん！！」

更に精神的なダメージを受けた静紅

そして静紅の思考は

無視されて先に進まれるのは嫌

←

両足を折って動けないようにしよう

と変わった

泣きながら立ち上がり静紅はゆらゆらと少年に近づく

「!!?」

今まで感じたことの無い嫌な気配に少年は動物のように身体を屈めて臨戦態勢へと移行する

その構図はまるでライオンVSシマウマであった

シマウマはどちらか

ライオンはどちらかなど聞くまでもない

静紅はゆらゆらと接近

「…」

後退りする少年

初めて恐怖を感じた瞬間であった

「殺す!!」

しかし謝罪も知らない

恐怖も知らない少年にとっては理解できないものである

《炎舞》

殺らなきゃ殺られる

そのことは理解した

そして再び殺し合いが始まる

「遺跡まで…長そう…だ」

ポツリと感想を洩らす少年

「あら？　そうよ遺跡よ…両足を折ったら時間かかったちゃう」

思い出したかのような静紅

少年を包んでいた恐怖が消える

「殺し合い…か？」

少年としても殺し合いは楽しいが目的まで逸れるのは面倒らしくす
ぐに矛を納める

「いえ遺跡に行きましょう」

再び逆方向に歩き出す静紅を放置して少年は遺跡に向かう

遺跡には二種類あり上に進む塔のような遺跡と

下に進む穴のような遺跡である

今回の遺跡は後者の下に進む遺跡であり、森のなかで見つけにくい
遺跡になる

しかし、すでに遺跡の森は庭のようなものである少年は迷うことな
く入口に向かう

深い森の中で方向がわからなくなるのは当然だが、静紅のアホも足
されて悲惨な状況である

「着いた…ぞ」

「あら…ここがそうなの？」

着いたところは大木であった

静紅は周囲を見渡すが入口のようなものは見つけられない

「上」

少年は大木の上を指差す

「あらあら…」

そこには穴があった

大木の中が入口

言われなければ気付かない

「よく知ってるわね…」

「魔力が強い…だからわかる」

大木が息を吐いているかのように穴から魔力が漏れ出ている

意識しなければ静紅にはわからなかった

少年は少しでも魔力を探知すると向かい、人間なら殺す、他の物なら放置を繰り返していて見つけたものだ

少年は跳躍して器用に穴へと入り込む

「…」

しかし静紅は頭をぶつける予感がした

自分が入ろうとした瞬間に枝が折れ大木に頭をぶつける

そんなイメージができてしまった

「…どうしよう…」

少し考えたのち静紅が行った行動

「…そうだわ♪」

それは穴を掘げようと手に力を込めることである

手刀の形を作り全力で薙ぐ

1,000年は越えていそうな巨大な樹

静紅の頭をぶつけたくないからという理由で消し飛ばされた

「ふふ…これでよし」

入口の樹が消し飛ばされて底が見えないほどの大きな穴が現れた

「さあ…Sランクの遺跡…楽しめそうだわ」

鼻唄混じりに楽しそうに穴に入ろうとして

「あら!!?」

静紅は再び裾を踏んづけて頭から穴にダイブした

「ひいやああ!!?」

絶叫をあげながらSランクの遺跡に突入

「…?」

少年の真上に落下コースだったが気配を感じていた少年は受け止めずに避けた

「へぶ!」

顔面から着地する静紅

しかしダメージはあまりない

少年と静紅がいる場所は岩や土で舗装された穴蔵ではなく木々が茂げ、光も地上のように明るかい場所であった

初めての恐怖（後書き）

名前 静紅

種族 化物の子供

所属 盗賊

武器 なし

魔法 完全領域

人の想いによって化物となった少女

少年と出会うまでは孤独だった

災厄という仲間にあえて孤独が癒える

静紅が遺跡の森にいったのは遺跡の宝と災厄の少年に会うためでもある

近距離が得意な間合いで手刀と完全領域による防御壁で攻守共にバランスが良い

キレるスイッチ 化物と言われること

力 A

器用 A+

魔力 S

魔法 S

素早さ A+

近距離 S

中距離 B+

遠距離 B

遺跡攻略（前書き）

遺跡に入った少年と少女

S
ランクの遺跡とは…

遺跡攻略

「私って遺跡に入るのは初めてだけど、こんな場所なのね」

少年と静紅は森の下に森があるという不思議なこの遺跡にいた

空のようなものも見えて見渡す限りは森であった

通路のようなものはない

完全に外と同じ雰囲気

少年としてもいつもとは雰囲気が違うことに少し気になったが気にせずに先に進む

「まっ…待って」

いそいそと少年を追う静紅

カチ、と何かのスイッチが入る音

「あ…」

もはや何のスイッチかなど言う必要はないだろう

《炎舞》

草で隠れていたスイッチを静紅が踏むと同時に上空から隕石が降ってきた

大きさは10メートル程

少年はスイッチを踏んだ瞬間に魔法を発動しており、赤い炎の球体を形成

大きさは隕石の大きさの半分程度だが問題なく相殺する

「あらあら…」

「お前…殺す…か？」

初っぱなから罠にかかるという足手まといっぷり

少年は軽く殺気を放つ

「わ…わざとじゃないのよ!!?」

慌てながら静紅は

カチ、と再びスイッチを踏んだ

『…』

責めるような少年の眼

地面から二つの巨大な土の手が現れて二人を潰そうと襲い掛かる

《完全領域》

静紅は魔法を発動

自分と少年を包むように防御壁を展開

防御壁に突撃した土の手は逆に粉碎された

「…ごめんなさい」

「…っ」

少年は軽い舌打ちをする

「座れ…」

静かな圧力

「はい…」

「お前遺跡初めてだ…だから説明する」

少年としても無駄に魔力を使うのは面倒である

「遺跡：Sランクは三層ある。一層、造ったやつの罠今いる…二層、変質した生き物や自然物：三層、ゴーレム：罠があるのはここだけ…」

一層目はこの遺跡を造った者の趣味趣向による罠である

造った者が強力な魔法使いであればあるほど罠も強力になる

二層目は遺跡に眠る宝の魔力を浴びて存在が変質した生き物や自然

物がいる

奥に眠る宝が貴重なものであればあるほど強力な何かに変質する

三層目はAとSの境目と言われる層

造った者の分身ともいえるゴーレム

Sランクに位置する遺跡の作製者は全員が強力な魔法使い
楽には勝てない

少年としては三層目までは無駄に魔力を使用する気はない

「…わかった…か？」

「わかったわ!!」

名誉挽回と意気込んで立ち上がる静紅

カチ、

もはや汚名挽回であった

「…」

舌の根が乾かぬうちにある

「…わかった…」

何か諦めた少年

静紅の襟首を掴む

「ん？」

大木から手と足が生えて少年と静紅に襲い掛かる

「…死ね」

その大木へと静紅を投げつける

「ふえええ！？」

《完全領域》

投げられながら魔法を発動

勢いと固さで大木を真つ二つに粉碎する

「ななな…なにを」

魔法を解除して空中で態勢を立て直す

その瞬間に少年は再び静紅の襟首を掴む

そして再び投げる

静紅が好きに移動するから面倒なのだと悟った少年は静紅を投げて運ぶ

空中にも罠はあるが少年が投げた軌道には一つも罠がない

簡便の運搬方法だ

もっとも静紅でなければ投げた瞬間に首がもげる危険な方法である
少年としても一層目はつまらないため次へと進みたいと考えていた
森の中で通路もないため目指す場所がわからないというこの遺跡の
一層目の最大の罠

「あゝなんか慣れるとこれ楽ね」

しかし少年は迷いなく進む

この遺跡を発見した時のように魔力の通気孔を探しあてていた

そこへと進むだけである

「はあゝ楽チンね」

慣れた静紅は力を抜いてなすがままに投げられる

「死ね…」

釈然としない少年はそのまま受け止めずに放置

当然ながら重力はあり、落下する

「へび!!」

力を抜いていた静紅はそのまま地面に落ちた

「ふぶ!!?」

ワンバウンド

「ひべ!?!」

ツーバウンド

「はぼ!!」

スリーバウンドで勢いが止まる

「…うう…」

生きていることを確認して少年は舌打ちをする

プルプルと落下の衝撃で震えている静紅を無視して少年は下へと続く穴へと落ちる

前に少年は小石を虚空へと投げる

第一層目攻略

カチ、

少年が投げた小石はスイッチを見事に当てて罠を発動させる

残ったのは静紅のみ

つまり静紅に向けて罠が発動

「うう…ひどい目にあったわ…」

あの後も鎌鼬を避けてスイッチ

その後の罾も避けてスイッチ

そんなこんなで五回ほど罾 & amp; スイッチを繰り返して10分
後にようやく第二層に降り立った静紅

「…あら…終わり？」

その頃には翼がもぎ取られたドラゴンの腹をを少年が引き裂いていた

最後の一匹

数十はいたドラゴンは腹を引き裂かれて全滅していた

ニタリと狂喜の笑みを浮かべた少年

「さて…次が最後かしら」

第二層目は静紅が入った瞬間に攻略

根も残されていなかった

「…」

少年は再び平常状態に戻り、頷いた

穴は見えるところにあり、すぐに降りることができる

「疲れてない？」

「別に、」

少年が頷いて三層目は二人で降り立つ

そこは50メートル四方の石でできた部屋であった

今までとは別の意味で雰囲気の違い、遺跡のようなイメージである

「…なんか普通ね」

拍子抜けという感じの感想を洩らす静紅

「…宝はそこだ」

部屋の奥に扉があった

第三層であることは間違いなくつまりそこが目的地である

少年が指差すと同時

『!?!?』

少年と静紅に圧力が襲い掛かる

「ようこそ…少年少女、私はここの作製者でありゴーレムだ…」

長身の男が部屋の中央にいきなり出現した

圧力が更に強くなる

男は若い風貌ですらりとした長身に外套を羽織っている

見かけはただの優男

しかし外見で姿を判断するのは間違いである

少年と静紅も外見で判断してはならない者である

「待ち遠しかったぞ…私を完全に殺してくれる少年と少女よ」

圧力が更に増す

爽やかな笑顔を向ける男

少年と静紅は一步引いた

一步引いてしまった

正真正銘の戦いの意識をもっている時に、純粹な恐怖を感じて引いてしまった

「さあ殺し合おう、反則級の少年と少女よ…私はアギト…生前は絶対強者級であった、相手にとって不足は無いだろう」

遺跡攻略（後書き）

はい、初見の方は初めましてハチャメチャ魔王からの人はお久しぶりです。

反則級とか絶対強者とか意味のわからない単語は次話で説明します
読んでいただきありがとうございます。

絶対強者級（前書き）

遺跡のゴーレムは絶対強者級だった。
いやまず絶対強者級ってなに？

絶対強者級

「絶対強者級…？」

少年はその単語がわからずに首をかしげるが静紅は知っているらしく、その単語を聞いてビクリと震えた

「…強さには三段階あるわ…一般級、反則級、絶対強者級。一般級は魔力が扱えないいわば雑魚、反則級は一般級と絶対強者級の間、絶対強者級は…」

一旦静紅の言葉が途切れる

一度口を閉じて息を吐く

「気まぐれで世界を滅ぼすことができる強さ…」

「…」

静紅の言葉に少年は黙りこむ

「説明の手間が省けたかな？礼を言う」

アギトは爽やかに微笑む

感じる圧力は変わらない

「一旦引きましょ…私達じゃ勝てないわ…」

静紅は8歳にして引き際を心得ていた

生きていれば勝ち

それが静紅の考えであつた

「そうはいかない…殺してほしいんだ」

《地華碎蓮・閉》

アギトは魔法を発動

降りてきた穴が土で塞がれる

逃げ道は完全に無くなった

「…あは…」

ずっと黙っていた少年の口が開く

その笑みは災厄の笑み

狂喜の笑みを浮かべた

全魔力を開放

その総量はアギトより劣る

だが

「あは…あははは！…あははははははは！…」

《炎舞》

少年は笑いながら魔法を構築

炎を腕に宿らせてアギトに接近する

「ちょっと…！！？」

静紅もその行動は予想外であり、反応が遅れる

《地華碎蓮・壁》

少年の炎を纏った拳

アギトに向かって放たれたそれは空気中に出現した土の壁で防がれる

「あははは！…！」

防がれたが少年の笑いは止まらない

高く跳躍し壁を乗り越えて再び突っ込む

《地華碎蓮・槍》

アギトは槍を生成し射出

巨大な土の槍が少年に放たれる

「あはは！」

少年は空中で右腕の炎を勢いよく燃え上がらせる

ジェット噴射の要領で少年は一回転

そのまま槍を横殴りにする

軌道を逸らし回避した少年は再びジェット噴射の要領でアギトに急接近

「やるね…逸らしたか」

《地華碎蓮・両手》

アギトは両手を合わせる

瞬間、少年の行く手を塞ぐように巨大な土の手が出現

少年の背後にも同じ物が現れて避ける間もなく押し潰す

《完全領域》

「…私を忘れちゃ困るわ」

ぎりぎりの所で静紅が追い付き少年を護るために防御壁を展開

円形の防御壁である静紅の完全領域は全方位関係なく防ぐ

「あはははー！」

「っ！！？」

少年が笑うと同時に静紅は完全領域を解除

すぐさま距離を離す

静紅がいた空間に拳が放たれていた

「敵味方関係なしだな…」

その様子を見ていたアギトの感想

だがそれは間違いである

少年にとっては敵味方は無く全てが殺す対象になっているだけである

《炎舞》

少年は槍を生成しアギトに射出

《地華碎蓮・壁》

炎の槍は土の壁によって防がれる

「あははは！！」

「速いな…」

その一瞬でアギトの背後まで移動

目眩ましに放ったため防がれることは予想していた少年

そのまま手刀を放つ

「だが残念」

ひらりと横にずれて回避しお返しにと蹴りを当てる

防ぐこともできずに弾丸のように吹き飛ぶ少年

「!!?」

静紅は少年を受け止めようとするが、殺意のこもった視線を感じてとどまる

少年から目を放しアギトへと向かう

壁に直撃する少年だが、静紅の判断は正しい。あの場で少年を受け止めていたらその少年の手刀で静紅は殺されていた

静紅は両手を手刀の形にしてナイフのようにアギトに斬りかかる

恐ろしく速い静紅の攻撃を全て無駄の無い動きで避けているアギト

「速いね…」

余裕の笑みを浮かべるアギト

「あははは!! 死ね死ね死ね死ね!!」

笑い声

《炎舞》

アギトと静紅が少年に意識を向けるとすでに槍が放たれていた

アギトは静紅に腹部に掌底を放ち、地面に叩きつけて後ろに跳躍

「ぐっ!!」

地面に叩きつけられた静紅は避ける術がない

《地華碎蓮・隕石》

《完全領域》

アギトと静紅は同時に魔法を発動

静紅へと追い討ちに土の隕石を放つアギトと少年の槍と隕石を防ぐために防御壁を展開する静紅

「…ま…ず!!」

静紅の完全領域の防御は絶対ではない

炎の槍を防いだが隕石までは防ぐことができずに破壊される

一瞬だけ食い止めたことにより、静紅は逃げる時間ができた

隕石が防御壁を破壊して静紅へと迫る僅かな時間

一瞬ともいえるそのタイムラグ

《完全領域》

静紅は全力で後ろに跳躍して魔法を発動

衝撃波を防ぎきる

「はぁ：はぁ」

呼吸が乱れる静紅

掌底のダメージはでかい

この戦いで一番静紅が不利であった

アギトは少年と静紅を攻撃する

少年はアギトと静紅を攻撃する

だが静紅はアギトへは攻撃するが少年にはアギトを倒すためにも攻撃はできない

その攻撃対象の差はでかい

もしアギトに攻撃されて吹き飛んだ先が少年の場合は手刀で串刺しにされる

「…」

理性が無い少年と共に戦うには理性が邪魔であった

災厄と共闘できるのは化物だけである

(…嫌なのだけど…仕方ないわね)

静紅は目を閉じる

無理矢理化物である自分を引っ張り出す

目を閉じて、記憶を遡る

化物と呼ばれて蔑まされた記憶まで遡る

生まれる前から化物と呼ばれて、殺意や敵意を受け続け
生まれてきたことで化物と呼ばれて道端に放置され何かある度に石
や刃物を投げつけられ傷つけられ、気持ち悪がれた記憶

静紅は少年と違い一族皆殺しまで3年の月日があった

その忌まわしき三年間を思い出す

理性をとばして化物になるために、普段は言葉一つ言われれば吹き
飛ぶもの

しかし、自分で化物になるためには記憶が必要であった

そして、強い憎悪をもって化物と言った母親の顔を思い出した瞬間

「ふ…ふふ」

化物が口を開いた

「あはははははははははは！強い強い！！殺す殺す皆殺しだ！」

「これは……！」

少年の笑いが更に増すと同時に動きが速くなる

アギトは少年の攻撃を距離を離して回避

静紅の雰囲気が変化したことに気付く

「ふふふ…さあ殺してあげるわ…」

静紅は少年と同じ狂喜の笑みを浮かべていた

化物は災厄と同じで敵味方など関係はない

災厄と化物と絶対強者級の殺し合いが始まる

「なるほど……これがあの少女が言ったことか……」

意味深なことを呟くアギト

《炎舞》

だが二人は気にせずにアギトへと突っ込む

目標が同じな理由はアギトが一番強いからだ

強い者との殺しあいを望んでいる災厄と化物は協調性の欠片も見せずに各々が攻撃を放つ

「あははは!!」

炎が少年の身体を包み込み一直線にアギトへと突撃する

炎を纏った体当たり

《地華碎蓮・壁》

アギトは土の壁を少年の体当たりの軌道に構築する

「ふふ…」

その隙に静紅が間合いに入った

先程と同じような静紅の手刀を避けるアギト

いや避けたはずであった

「…はや…い!?!」

先程よりも遥かに速い手刀を放ちアギトの肩を掠めた

油断ではない、ただ静紅の最大速だと記憶してしまったアギトは予想よりも速い静紅の手刀をかわしきれなかったのである

仕切り直しに一度静紅から距離をとろうとするアギトの背後

「あははは!!」

土の壁が壊れた

少年が力ずくで破壊したのだ

「っ!!?」

「あはははははは!!ちぎれろお!!」

少年からすれば壁を壊したら獲物が自分に接近していたのだ

身体を包んでいた炎を右腕に集中し拳を握りしめて放つ

《地華碎蓮・杭》

地面から土の杭が飛び出て少年の右腕の骨を砕く

軌道を剃らすことに成功して、アギトは少年が防御ができない右腕の方向から蹴りを放つ

「あははは!!」

しかし、少年は折れた右腕で無理矢理蹴りを防ぐ

「な!!?」

少年自体は蹴りで吹き飛ばしたが、本来なら確実に首が吹き飛ばはずであった

そして蹴りの隙

「ふふ…ねえ…早く血を魅せて」

妖艶に微笑む静紅がアギトの左腕を掴んだ

そしてそのまま左腕は切り落とされる

「ぐっ!!」

製作者の亡霊でゴーレムの役割をもつアギトは静紅の望み通りに血はでない

「ふふふ…まだ出ないの？」

（…まずい!!）

静紅の笑みに嫌な気配を感じ取ったアギト

《地華碎蓮・浮上》

土が静紅の足下に出現し爆発的に増殖する

「…が!!」

頭から天井に叩きつけられそのまま土が静紅を押し潰す

（二人…!!）

そして残るは少年のみ

左腕は無くなったがそれでも少年を驚異とは感じない

（君はただの猪突猛進だ：そして攻撃力が足りない）

少年の右腕自体はアギトと同じで完全に使えない

条件は同じ

《炎舞》

《地華碎蓮・連槍》

アギトは地面から無数の土の槍を放つ

一本一本が5メートル程の巨大な槍

50メートル四方の空間を埋め尽くし避け道が無い

1〜2本までなら少年でも相殺できるが後は原形を止めずに貫かれるだけである

「あははは！！もっと強く！！」

そして少年は赤色の槍

ではなく緑色の炎の槍を生成

量より質を表すかのように巨大な槍を放った

(…まづい!!!)

緑色の炎の槍

見かけ倒しではない

感じ取れる魔力の量の桁が違った

(…進化した…この短期間で!!?)

魔法は進化する

本人が望むままに、より強力になる

だが生まれて五年の少年が戦いの最中に進化させた

本来であれば一生をかけて進化するかしないかといった次元である

アギトですら20年はかかったのである

常識が打ち破られ驚愕しそして動揺となって隙を作る

少年の槍は無数の土の槍を全て相殺した

「あははは!!」

槍を放つと同時に突っ込んでいた少年

その手には緑色の剣が握られている

「…ちっ!!?」

アギトは少年と距離を離そうと後ろに跳躍する

魔法が進化していても猪突猛進は変わらず距離を離して魔法を浴びせ続ければすぐに倒せると判断した

「ふふ…惜しかったわね」

《完全領域》

「なっ!!?」

跳躍したアギトは完全領域内

防御壁に自分からぶつかりに行く

少年の槍

それは土に拘束されていた静紅を開放していた

圧力により一瞬だけ気絶していた静紅は正氣に戻っていた

「あははは!!」

そして少年も完全領域内

笑いながら純粹に楽しそうに嬉しそうに笑いながらアギトを切り裂いた

「ぐっ!!」

少年の一撃はアギトの両足を切り裂いた

「あははは!! 燃えろ消えろ死ね殺す!! 壊す砕く灰になれ!! 灰も残らず塵になれ!! 塵も残さず焼失しろお!! あははは!!」

少年の炎の剣に込めていた魔力が更に増大

《完全領域》

「…予言通りか…」

静紅は一度魔法を解除して再発動

自分だけを守るように発動

巨大すぎる火柱が50メートル四方の災厄と化物と絶対強者級の戦いでも壊れなかった壁を粉碎、二層目、一層目を突き破り空高くまで昇る

当然ながらアギトの姿は塵も残していない

「あははははは…は…」

そして魔力を使い果たした少年は笑いながら気絶する

「…あらあら…」

その様子を見て微笑む静紅

「けど……私も……限界ね……」

アギトを倒すためと自分を護るために使った完全領域

全身の骨が最低でもヒビが入っていた静紅はその二回で限界がきていた

少年と同じようにその場で気絶する静紅

そして一人の白い翼をもった少女が少年と静紅が気絶している遺跡に降り立った

「やあ、何十年ぶりかな？」

⋮

そんな少女を出迎えたのはアギトであつた

14才ほどの外見で眠そうな目をしており、小動物のような可愛さが溢れている身長は150cmと小柄な少女は無表情に無言で返事をする

「しかし：死んで確かに10分の1まで弱くなったとはいえ、本当に私が殺されるとは思わなかったよ」

微笑むアギト

彼は今魂だけでこの場にいる

必要な事が終えるまでは消えることはできない

「…」

少女はずっと無言

その瞳は少年にだけ注がれている

「まあいいか…それでこの少年が次の魔王でいいんだね？」

「…」

こくりと僅かに頷く少女

「それで面倒な手続きは全部やってくれるんだよね？」

「…」

再びこくりと僅かに頷く少女

「良かった…やっと死ねるよ」

本当に嬉しそうに微笑みながら消えるアギト

「…お疲れ」

最後の最後に少女は口を開いた

「…神ってのはわからないね…」

その言葉を聞いて最後の最後に苦笑に変わった

残った少女

やはり少年から視線を外さない

「…魔王…大変…頑張る…ひ…お前…死ぬ…やだ」

ぽつりぽつりと少女は単語を紡ぐ

何かを言いかけたが我慢していた

「…」

少女は屈んで少年の頭を不器用に撫でる

少年は気絶しながらも反射的に手刀を繰り出すがまるでわかってい
たように手を引っ込めて回避する

「…270年…会う…楽しみ」

少女は少しでも微笑みながら翼を羽ばたかせて浮上する

「…」

しかしすぐに、再び降り立つ

懐から一冊の本を静紅の近くに置いてその上に紙を置く

今度こそ役目が終えたのか満足そうに帰っていった

本のタイトルは『魔王の説明書』

置かれた紙には『その子に読んであげて』と記載されていた

災厄の少年の運命が大きく変わった日であった

絶対強者級（後書き）

名前 アギト
種族 ゴーレム
所属 魔界の魔王
武器 なし
魔法 地華碎蓮

生前は絶対強者級で魔王だった青年
しかし、食中毒で他界した

魔王を誰かに引き継いでもらわなければ成仏できなかったため、遺跡でまだかまだかと待っていたが、神の少女によって成仏できる日を教えてもらってからは大爆睡していた

中距離が得意な間合いで土の壁と槍で敵の動きを制限しながら戦うのが得意

キレるスイッチ 死因となったキノコ

力 S (SS)
器用 S+ (SS)
魔力 SS (SSS)
魔法 SS (SS+)
素早さ S (S+)
近距離 S (S+)
中距離 S+ (SS+)
遠距離 S (SS)

○内は生前時のステータス

別れ（前書き）

さて魔王とは何か？の説明です

別れ

「うゝん…」

二日後

静紅は目を覚ました

一度伸びをして辺りを見渡す

「あの子はまだ寝てるのね…」

身体の調子を確認しあまり問題がないことを確認する

「なにかしら？」

そこでようやく本を発見する

「あの子に読んであげて…えゝと、魔王の説明書」

少年が寝ていて暇だった静紅は本を開く

「ふゝん」

一度読み終えて本を閉じる

（この子にとっては重石にはならなそうね…）

少年はまだ起きる気配は無くもう一度読み始める

「…」

二度目を読み終えた静紅

ようやく少年が起き上がる

「おはよう身体は大丈夫？」

片腕の骨が粉碎された少年

だが、一度両手を握り開く

「…問題ない」

「そう…良かったわ…それで知ってほしいことがあるのだけど…いいかしら？」

「知ってほしいこと？」

聞く気はあるようで、静紅は本を見せる

「そう…魔王について」

「…文字は読めない」

少年ら会話を聞く環境にはあったが、文字を読む環境にはいなかった
必然的に文字を読む機会はなく、喋ることはまだできるが文字を読むことはできない

（だから：読んであげてって書いてあったのかしら：）

読めないことも確かに理由の一つに入るがそれ以上に少年は本を読まない

これを手に取ったのが静紅でなく少年の場合は確実に燃やしていた

「じゃあ簡潔に話すと：あなたは魔王と呼ばれる簡単にいえば魔法使いの王になったみたいね：それでその魔王の仕事は世界を守ること：それ以外は無いみたい、魔王を辞める方法は一つで魔王という称号をかけて戦いに負けること：はい、何か質問はあるかしら？」

他にもゴチャゴチャ何か書いてあったが不要だと判断して静紅は切り捨てた

知っておくべきだろうことを静紅は少年に教える

「：魔王になった：理由がわからない」

「：多分だけどあのアギトが魔王だったのだと思うわ：それであるが殺したからそれでだと思っただけ」

静紅の予想は当たっていた

「：世界を守ること？」

守るという言葉は少年にとって一番縁の無い言葉である

自分の命ですら守ろうと思っただことすらない

「：何かこの世界の危険があったらわかるみたいよ。まあ多分けど相手が絶対強者級で気まぐれで世界を滅ぼそうとしたらわかるのだと思うわ」

それも合っていた

世界が滅ぶ理由は絶対強者級の気まぐれで世界を滅ぼそうとした時ぐらいである

「あいつみたいに強いやつと殺し合える…か？」

「そうみたいよ…」

「なら…なんでもいい」

災厄と呼ばれようとガキと呼ばれようと全く気にしない少年にとって殺せるならばなんでもいい

今までは宝で獲物を釣っていたがそれに魔王という称号が追加されただけである

「それじゃあ、これ渡すわね。読めるようになったら読むと良いわ」

《炎舞》

「ちょ…!!!？」

渡した瞬間に少年の手から炎が本を包み込んで燃やした

「荷物はいらない」

所詮荷物である

少年は動きやすいように荷物は持たない主義である

今まで遺跡攻略して得た宝は全て放置して一番魔力が高くて貴重そうな小型の物だけを盗った

しかしそれも餌が釣れたら捨てるを繰り返していた

「…あなた、ちょっとそこで座ってて」

「…?」

盗賊として静紅はそれを許容するわけにはいかない

静紅は少年を観察し着物の袖から黒い布を取り出し座る

そして裁縫道具を取り出した

30分後

「はい、できた!! 着てみて」

静紅は物が完成すると少年に渡す

《炎舞》

そして渡した瞬間に本と同じように燃やす

「…燃えない？」

本と違うのはその物が燃えなかったことだ

「ふふ、結構レアな布でね、色々な攻撃に耐性があるのよ…拡げてみて？」

黒い布切れ

少年の考えていた印象はただ一つで拡げててもそれがフード付きのコートであっても変わらない

「まずね…突っ込まなかったけど…格好が汚いからそれに着替えて」

少年の格好は盗賊から剥ぎ取ったボロボロのズボンに布切れとしか言えないシャツにこれまた布切れとしか言えない外套である

今回のアギトとの戦いで更にボロボロになっていた

言うが早い、か静紅は外套とシャツを剥ぎ取る

「…うーん、手持ちであつたかしら…？」

少年は何の抵抗もしない

実際にもはや邪魔だったからである

またてきとうに餌から巻き上げようと考えていた

静紅は着物の裾に手を突っ込んでガサゴソと何かを探している

五分後

「できたわ!!」

黒いズボンに白い袖がないシャツに黒いコートを着た少年が発見された

「うん!!これでよし!!とりあえず、そのコート以外はただの服だけどそのコートは役に立つわよ!!まずそこらの鎧より軽くて丈夫、身体に合わせて大きくなるし、何より内ポケットにはポケットのサイズ内なら何でも入るし、荷物にもならないわ!!」

目付きが物凄い悪いがそれを除けば普通の少年の格好に見える

「…もらう」

黒いコートを見ている少年

今まで宝の持ち運びがダルくて一つしか持たなかったがこれさえあれば宝を無尽蔵に入れることができる

つまり餌が多い分獲物の食い付きが多い

断る理由などはなかった

「さて…それじゃ宝の山分けをしましょう?」

最初の目的へと戻る静紅

「わかった」

二人は宝が格納されているであろう扉を開く

『…』

開いたが二人とも言葉は発しない

宝が無かったわけでも貴重なものばかりで声が出せないのではない
魔力のこもった貴重なものや金銭的な価値がある宝石でその部屋は
埋め尽くされているが

静紅は一つの宝のみ盗りたいだけで他には目もくれず
少年はとりあえず片っ端からコートポケットに詰めるだけである

「あったわー！！」

目的の物を見つけた静紅

目がキラキラと輝いてとびきりの笑顔を見せる

静紅が手にしているものはナイフであった

だがただのナイフではなく、歪な形をしたナイフであった

そのナイフは絶対強者級であり、一流の鍛冶職人であるデスパラと
いう男が作成したナイフ

デスパラはナイフしか造らない。また、そのナイフは奇妙な形をしていながらも切れ味は海をも切り裂くとまで言われて いる

デスパラシリーズとも呼ばれている

静紅がそれを狙っていた理由として格好いいからである

嬉しそうに年相応の子供のようにはしゃぐ

少年はそんな静紅を完全に無視してポケットにどんどん詰め込んでいく

「…」

少年が掴んだのは一本の刀

黒く黒いどこまでも黒い刀であった

鞘も鐔も握りも刀身も全てが黒い刀

《炎舞》

とりあえず燃やすことにした少年

普通の刀であれば焼失するはずだが変形もしていない

「…」

少しだけ気に入った少年は脱がされた服を無事な部分だけ引き裂いて刀を背中にくくりつけるための紐にする

そして再び宝をポケットに詰め込む作業を再開する

その間静紅は地面を転げ回りながら喜んでいる

「…」

再び少年の手が止まる

その手にはビンがあった

中には白い光の球体がゆらゆらと揺れている

躊躇いなくビンを握り潰して割る

すると光の球体はゆらゆらと揺れながら消えていった

「…わからないな」

割ったら封印されていた凄い強い何かが現れると考えていたがそんなことはなく、一体なんだったのか理解できないまま少年は次の宝をポケットに入れていく

ようやくポケットの口に入りきる全ての宝を収納した少年の表情は満足気である

「これからどうするの?」

「これから?」

「私はもうここに用は無いから次の宝を探しにこの森をでるのだけ
ど：一緒に行きましょ？」

静紅の目的はあくまでもデスパラシリーズである

もう遺跡の森には無い

盗賊としてつるむのは好きではないが、それはつるんだ者が死ぬか
らであり少年ならばその心配もない

そして何より面白かったのだ

「：行かない」

「ええ！！？」

しかし、少年の返答はNO

理由としてはここには獲物が来るからである

世界を知らない

国を知らない

街を知らない

そんな世間知らずの少年にとってこの場所は良い狩場であり、遺跡
もあり退屈はしない

「そう：残念：じゃあ契約はこれで終わりね」

静紅はデスパラシリーズを集めたい盗賊である

少年にも少年なりの目的があつてとどまると解釈した

理由を知れば狩場ならもつとあることを教えることができたのだから
静紅は色々と生まれた場所なので事情があるのだろうと考えてすぐに諦める

本当に残念そうな静紅

「じゃあまたね」

「またね？」

別れの挨拶を知らない少年

少年が知っている別れの挨拶は死ねである

「再び会いましょうって意味」

静紅の笑みは少しだけ悲しそうな笑みであった

「…そうか…再び会うかはわからないが、またね」

またねと言われたのでその言葉通りに記憶した少年

違和感に笑ってしまう静紅

「ふふ…絶対また会うわよ…だって私とあなたは似てるもの…次会うときまでには名前を決めておいてね」

「わかった」

災厄と化物の共闘

一週間にも満たない時間だが、それぞれにとって価値のある出逢いだった

静紅は手を振って跳躍して消えていった

出逢いは唐突で別れも味気ないことだった

「…」

そして少年はそのまま今まで攻略した遺跡へと戻り宝をポケットへと入れた

別れ（後書き）

静紅と別れた少年

静紅から黒いコートをもらった少年はとりあえず片っ端から宝を集めます。

少年にとってかなり便利な物でこれから活用していきます

ようやく序章が終わります。

これまでの話は少年がどんな人物か？を理解していただくための話です。

ここからが本編です

きっかけの始まり（前書き）

ちよつと短いからです

ようやく本編が始まりました

きっかけの始まり

静紅と別れてから一週間後

少年はSランクの遺跡を攻略して宝をコートにしまって、遺跡を出て発見した盗賊を皆殺しにしてから寝る

といういつも通りの生活をおくっていた

静紅と会ってから変わったことといえば刀を使用するようになったことと、殺す前に名前を聞くことである

そんな少しだけいつもと違うがいつも通りの生活をしていた

少年は朝起きて血と悲鳴を欲してふらふらと森を歩いていた時のことである

「…なんだ？」

空気が変わった

威圧的な空気でどこか懐かしく感じる空気である

光が少年の前に現れる

初めは小さな白い光

それが光量を増していき大きくなっていく

そして少年と同じ大きさまで光が大きくなり人の形に変化していく

一際光が強くなるとそこには一人の少女がいた

「初めまして！！私は椿、あなたの名前は？」

普通ではない登場だが椿と名乗った少女は満面の笑みを浮かべた

「…」

少年は黙って刀を抜く

「ええ！！！？…ちよつと待って待って！！」

すると突然慌てる椿

当然の反応といえば当然の反応である

「…」

少年は刀を抜いただけ

椿を観察する

攻撃の意思を見せたが敵意も殺意も発さない

魔力も体つきもそこらの盗賊にも劣るレベル

少年と同じくらいの背丈に歳、茶髪でアホ毛が目立つ可愛い少女

民族衣装のような服を着ている

「えーと名前は？」

攻撃されないと判断して再び口を開く

「…」

静紅と会う前なら、問答無用で切り刻んでいた少年だがそんな気は起こらなかった

「…まだない。お前…なんだ？」

誰ではなくなに

少年は目の前の存在に問いかける

「私は椿だよ？」

少年の問いかけに名前ですぐ答える椿

「あなたは？」

そして再び名前を訊ねられる

「…まだない」

ただの少女

静紅のように強いわけでも

盗賊のように敵なわけでもない。ただの少女

少年にとっては初めて会った存在

触れたら簡単に殺せる存在だがそんな気は起きない

「…ごめんなさい」

少年のその言葉に何やら事情を勝手に推測したのか、目を伏せる

「…まだない。すぐに見つける」

不思議な現れ方をしたただの少女に興味が湧いた少年

「見つける？」

少年の言っていることが何一つ理解できていない椿

「…あは!!」

少女の問いに笑いで答えて手を上げる

《炎舞》

雨のように大量の矢が頭上から降り注ぐが少年の手から発せられた
炎が全て燃やしつくす

「さすがは、災厄といったところか…」

森から姿を現したのは青年であった

手には弓を持っているがその青年一人しか気配がない

少年の炎で消されたが無数の矢を一人で放ったということである

「キミ、私はどうすればいいかな？」

「…知るか」

木の後ろに隠れている椿

本人は隠れているつもりだが実際のところそんなものに意味はない

それは椿も感じていたのか少年に対応を聞くが冷たく一蹴された

「キサマが持っている魔剣を渡してもらおうか？」

「魔剣…？」

少年の背中を指差す青年

そこにあるのは黒く黒いどこまでも黒い刀

「魔剣っていうのか…お前の名前は？」

少年は青年に訊ねた

「俺か？俺はアルトだ」

アルトは弓を構える

「アルト…ねえ」

少年は何かを考えるようにぶつぶつとアルトの名前を呟く

《きゆうきゆうや弓矢矢・追尾矢》

魔法を発動する

光の矢が弦にかかり発射

放ったと同時に十数に分裂した

アルトは遺産持ちである

自身の力では魔法を構築できない者は遺産と呼ばれる魔法が使用することができ物を使用して強力な魔法を苦勞することなく魔法が使える

アルトの所持している遺産は弓である

弓に魔力を込めることでその魔力を媒介に弓が魔法を構築する

アルトが放ったのは数ある種類の矢の一つどこまでも相手を追尾する矢

「…いないか」

一つ頷いた少年

姿が消えて追尾の矢が消える

「なっ！！？」

弓が真っ二つに切断されていたことに気付いた時には少年はアルトの背後にいた

「くっ！！？」

振り向こうとした

「あは！！遅い！！」

その瞬間には身体は二つに切り裂かれていた

圧倒的な速度の差

「…弱い」

静紅やアギトと戦った少年はどこか満足できていない

血を見ると面白い

肉を切り裂くと笑いが込み上げる

悲鳴を聞けば楽しくなる

それは変わることがなかったがどこか満足ができなくなっている

血が沸きだつことが無くなったという表現が一番正しい

楽しいが物足りない

それは少年にとっての大きすぎる変化

「…まだ名前無い」

「…まだって…キミもしかして人の名前から盗るつもりなの!?!」

椿の問いに頷いた少年

思考としては簡単である

名前を決めよう

←

よくわからない

←

誰かの名前を盗る

←

そいつを殺す

←

自分の名前になる

少年は今名前を盗るために手当たり次第に聞いているがどれもパツとしない

「駄目だよ!! 名前は自分で決めるもんだよ!!?!」

「知るか…お前がつけろよ、気に入らなかつたら却下する」

「ええ!!?!」

ひどくてきとうであった

「じゃあジョン!!」

「却下」

「桜!!」

「却下」

「紅!!」

「却下」

「レスラ!!」

「却下」

「陽炎!!」

「…却下」

「どうすればいいのよ!!!??」

次々に却下された椿

怒りの飛び蹴りを放つ

「…」

軽々と受け止める少年

「だから、考え中だ…」

「あーうー!! もう寝る!! おやすみなさい!!」

怒りの発散場所が効かずに発散できなかった椿

諦めてその場に寝転がる

「…」

椿が何だかよくわからない少年

しょうがないので、同じように寝る

こんなファーストコンタクト

出逢いがあり戦いがあり、少し変わった災厄であり魔王の少年と不思議な現れ方をしたただの少女の椿

世界を変える二人の出逢いはそんなくだらない会話でコンタクトをしていた

きっかけの始まり（後書き）

椿と少年の出逢いです

ここからが

個人的には面白くなってきました

名前（前書き）

今回少年が名前を入手します

名前

少年が椿という少女と出会い共に行動してすでに一週間の月日がたっていた

「ねえキミ」

「なんだ？」

てきとうに森を歩き獲物を発見するまで歩く

いまだに名前が無い少年のことを椿はキミと呼び、少年もそれで認識している

「疲れたよー」

椿はただの少女だ

少年と同じペースで森を歩くのは辛すぎる

「…」

その場に止まる少年

別に目的があるわけでもなく、盗賊を見つけるために歩いているのだから急ぐ必要は無い

「ありがとう！！」

「…たく」

あまりの体力の無さに溜め息を吐く少年

椿は疲労が溜まっていたのかすぐに眠る

「なんで俺こいつを殺さないんだろう…」

自分でもわからない心の変化

なぶって殺す

それが今までの自分であった

視界に入るものは全て殺した

しかし、その時の気持ちの高ぶりはない

（何故だろう…）

自分でも疑問に感じてしまう

椿には殺す気が起こらない

歩くのは遅いし

腹は空かすし

喋りかけてくるし

少年にとっては不利益しか生まない

なのに行動を共にしている

少年が行動を共にしたのは静紅と椿だけである

静紅は面白く、自分よりも強い

遺跡の攻略には好奇心が湧いたので行動を共にした

椿は、本気を出さずとも触れないで殺すことができる弱い存在

(…わからんな)

少年は気づかない

いや、気付けない

理解ができない

少年はそんな環境で育たなかった

「あは!!」

気配を察知する

鋭敏すぎる感覚が少年の常時展開している察知網半径200メートルまで接近した盗賊達に気付いた

数は20

少年は魔力を解放

獲物に向かって跳躍した

魔剣を抜いて接近

「あはははは!! 獲物だ!!」

少年の存在に気づく前に10人

半数が細切れになる

血飛沫が雨のように降り注ぐ

「あははは!!」

口を開いて血を口に含む

「災厄のガキだ!! 野郎共!!」

少年は盗賊達にとっては恐怖の対象である

出会ったら必ず死ぬ

災厄から逃れるため遺跡を諦める盗賊も少なくない

災厄の存在を知りながらも遺跡の森にやってくる盗賊は二種類いる

ただのガキだと思っている盗賊

災厄に対しての対抗策を考えている盗賊

その二種類だけである

どっちにしる結果は変わらないがこの盗賊達は後者であった

ナイフや剣を持つものは固まって構える

弓を持つものはその後ろで構える

そして先頭に立つのは刀を抜刀せずに居合いの構えで構える盗賊団の団長である

「行くぞ!!」

再び一声

少年は何をするのか気になり待ちの態勢に入る

次の瞬間には盗賊団の団長を残して四方八方に散開する

（波状攻撃…？）

遊びを覚えた少年はただ待つ

抜いた刀を回して相手の出方をうかがっている

しかし気配は200メートルから出ていく

「？」

「ああ…理由がわからないってか！？簡単だ…お前に挑むと全員死

ぬ、なら部下を守るために一人残るのがボスの努めだろうがぁ!!」

一瞬で少年の懐に接近

キラリと鞘から刀身が光るとすでに抜刀は完了していた

高速の一撃

「っ!!」

少年はそれをバックステップで回避する

団長はすでに再び居合いの構えになっている

抜いてから納めるまでの時間が短い

「…お前…名前は？」

「飛影だ…」

盗賊団の団長が少年の問いに答える

「飛影…飛影か…」

ぶつぶつと何度も復唱しながら考えていた

その間も飛影の猛攻は続くが少年に軽く受け流されている

「あはは!! 気に入った!! けどその前に…」

《炎舞》

少年は笑みを浮かべながら火の玉を9つ構築する

そして察知網を一キロ程まで拡大する

「無駄な努力…だな」

少年の感覚で九人の逃げた盗賊の気配が知覚した

「ガキィ!!?」

少年が何をするのかがわかってしまった飛影

攻撃を止めさせるために攻撃を放つが

パキン、と小気味良い音が響いた

刀が折れた音である

少年がやったことは抜刀のタイミングに合わせて刀を振っただけである

それだけで飛影の刀は折れる

「なっ!!?」

驚愕の表情を浮かべる飛影だが、そんな暇はあってはならなかった

「あは!!」

炎が全てバラバラの方向に射出される

九つの炎が向かう先は飛影が逃がした仲間達

巨大な炎柱が九つ空に昇る

結果など想像するまでもない

「このガキィィ!!」

飛影は全力で握った拳を少年に放つ

身長差は少年の三倍

体格も体重も圧倒的に勝っている飛影の拳

「あはは!! 殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す!!」

少年と飛影の拳同士のぶつかり合い

砕けたのは飛影の拳であった

いや、拳だけでなく肩まで弾け飛ぶ

「ぐ…あ!!?」

「つまらなかった…ぞ!!」

《炎舞》

無数の赤い炎の球体が飛影を取り囲む

「死ね…」

少年が拳を握る

それを合図に炎の球体が飛影の身体を貫いていく

一つ一つは小さな球体

なぶるように飛影の身体に小さな穴を作っていく、球体は決して貫通せずに飛影の体内に残る

「名前が決まったから…派手に殺してやる」

握りしめた拳を開いていく

「あはは!!」

呼応するように体内の球体が大きくなっていき

「弾けろ!!」

炎が爆発する

周囲の木々が吹き飛ばされていく

「あはははははは!!!!!!」

半径150メートル

爆心地のように燃えつくされた中心で少年は笑う

欲しいものが手に入ったような子供のように笑う

「死ぬかと思ったわぁ!!」

そんな災厄の少年の後頭部にドロップキックをぶちかます椿

「お前には当たらないようにしたぞ」

後ろに眼があるようにドロップキックをかわす少年

ドロップキックを外して地面にダイビングする椿

「ほら…」

少年が指差すのは無傷のライン

扇状に広がる無攻撃地帯

「キミ…常識で考えてよ」

確かに安全だが、その地帯以外は燃えて吹き飛び死ぬかと思うのにも無理はない

「おお…お前!…俺にもできたぞ!」

「何が!!? しかもお前じゃないもん!!」

あまりにもマイペースな少年

椿はまだ名前で呼ばれたことがない

おい

お前

この二種類である

「名前だ」

ニヤリと笑う少年

その笑顔は初めて見せる普通の笑みであった

（そんな風に笑うんだ!?!）

「じゃなくて…なんて名前!?!」

意外な笑みに戸惑ってしまった椿

とりあえず本題である

あれだけ自分の意見を却下されて結局どんな名前にしたのかがかかり興味をそそられる

「飛影」

少年は今しがた手に入れた名前を名乗る

「飛影…?…凄い!! マトモだ!?!」

突拍子もない名前になったかと冷や冷やしていた椿

まともな名前に驚愕する

(てっきり、ゴルザバボスガイエンバサケノフとか格好いいけど変な名前にすると思ってたのに…)

椿は自身の思考がかなりおかしいことに気付くことはない

「馬鹿にされた気がした…ぞ?」

「そんなことないよ」

あははと苦笑いする椿

「オホン!!」

一度可愛らしい咳払いをする

「もう一回自己紹介するね!! 私椿!! あなたの名前は?」

何事も形からという言葉がある

椿は満面の笑顔で二度目の自己紹介を行う

「飛影」

少年も名乗る

無愛想に名乗っただけだが、椿ははちきれんばかりの笑顔になる

「これからよろしくね!! 飛影くん!!」

名前

初めて呼ばれた名前

災厄なんて呼び名でもなく、個人を呼ぶ少年自身の名前

それが喻え殺して奪ったものでも、その飛影という名は今は少年のものだ

「…ん」

どこか痒い

照れを隠すかのように軽く頷く飛影

それは今までありえないことで飛影は自身がどんどん変化していくことに気付いていない

気付けても何故? がわからない

その言葉を知らない

それを一度も受けたことがないからだ

生まれる前から今まで殺意、敵意、恨みと負の感情をその身に受け

続けていた
し

静紅は冗談レベルの殺気しか無く、何より存在が近かった

だから戸惑ってしまい、一緒に行動した

椿は負の感情は何もない

あるのは好意だけ

それは少年が生まれてから初めて受けるものである

家族や友達

それは飛影にとって無いものでそれは欲しかったが飛影は絶対に気
付かないもの

孤独を癒す親しいものである

だから飛影は椿と無意識のうちに行動している

（何だろうか：この感覚は）

飛影が気付くのはそう遠くない未来である

名前（後書き）

孤独だった少年

椿が何故飛影に好意（友達とか家族に対する）があるのか
惨殺する飛影に何故ひかないのか

それは後々です

街へ（前書き）

更新遅くなりまして申し訳ありません

街へ

「ねえ、飛影くん」

それはある日のことだった

飛影の名前が決定してから数日後のことだった

「なんだ？」

現在飛影と椿は食事をしていた

少年は災厄の子として食事をしなくとも生きていけるが、椿はそうはいかない

五歳の少女の目の前には動物の丸焼き

「これは食事じゃない!!」

今まではどんなものが出されても我慢していたがついに堪忍袋の尾が切れた

「なぜだ?…食べれるぞ」

そう言って飛影は丸焼きの腕をもぎ取り食らい付く

「だってこれ…人間でしょ!!?」

椿が指差すのは、動物の丸焼き

より具体的には先程飛影と椿に襲いかかり飛影が返り討ちにした盗賊

「だからなんだ？ 食べる」

飛影は頭をかち割り脳を取り出す

椿に渡そうとするが、全力で首を横に振る

ならばとそれを口に含む飛影

「人間は食べ物じゃない！！」

「お前がまともな食い物にしろって言ったんだろ…？」

「そういう意味じゃないよ！！？」

椿がお腹減ったと言ったのが始まりで

ちょうど良く盗賊が来た

飛影はとりあえずで心臓を破壊してぶち殺し、それを椿に渡した

いや、まともな食べ物にしてよ

と椿がそれを断り、飛影は炎舞で丸焼きにした後が今である

「普通に考えて人間は食べ物じゃないの！！」

「…食えれば食べ物だろ？」

常識と非常識の戦いが始まる

「肉は固いし臭いし見映え悪いし」

「柔らかい脳を渡そうとしたし、匂いが出ないように燃やしたし、見映えは我慢しろ」

「意味がわからない!!」

「俺も意味がわからない」

椿の常識と、飛影の常識

椿の常識は確かに一般的な常識だ

しかし飛影の常識は非常識だ

どっちが悪いと言えば飛影が悪い

「美味しいと兎の肉を食べたり魚を食べたりしてただろ？」

「…え？ うん、あれは美味しかったよ」

濃い味では無かったが出来立てのこともあり、素材の味だけで美味しいと感じることができた

「同じ動物だろ？」

「…」

なるほど、と椿は合点がいった

飛影は人間を人間と見ていない

あくまでも獲物だ

だから飛影にとっては、食用の動物も愛玩動物も人間も同じなのだ

そこに違いはない

飛影のその考えは正しく真理ではある

「う…」

何も言い返せない

それは正しいのだ、道徳を考えなければ

「違うのは違うの…」

弱々しい抗議

「だからなぜ？」

飛影にとっては同じ殺せるもの

「あ…う…」

頭を抱える

理解させるための言葉が何も出ない

「よし！！街に行こう」

常識が無ければ常識を知らせようと椿は決断する

美味しい料理を食べさせれば変わるはずだ、と考えた

「まち？」

しかし飛影はまず街の存在すら知らない

遺跡の森から出たことがない飛影にとって街が理解できない

「えっと…私も詳しくはわからないけど…人がいっぱいいて、賑わってるところ」

「どこにあるんだ？」

興味が湧いた飛影

椿の説明では獲物だいいっぱいいて、退屈しないところが街と認識した

「…わからない」

飛影が興味が湧いたのは椿にとっても良いことだが問題は二人共に街の方向がわからないことである

「んゝ盗賊の人に聞いてみるとか？」

盗賊なら遺跡の森の近くの街に詳しいだろうとあたりをつける椿

「そうするか…」

飛影は常時展開している感覚200メートルを拡げる

500メートル

一キロ

二キロで飛影は止める

「いた…」

少し離れたところに盗賊を発見する

「えっ？ほんと！？」

飛影はおもむろに椿の首根っこを掴む

「ちよっ！！？まっ！！？やることはわかってるけどお！！私は死ぬぞこらぁ！！？」

飛影がやろうとしたこと

投げ飛ばす

椿はただの子供である

二キロほど離れた場所に投げ飛ばされれば投げた瞬間に頭が吹き飛ぶことは確定している

ジタバタと暴れて飛影にボディブローを直撃させる

「…」

まるで効いていない飛影

「死ぬからね！！優しく運んでよ！！？」

しかし椿の本気の説得が効いたのか飛影は手を離す

いそいそと椿は飛影の背中から首を掴んで脚を飛影の腰にホールドさせる

なすがままの飛影

「微速前進」

準備ができた椿

飛影は微速前進の意味を知らなかったがゴーサインだと認識

ゆっくりと脚を曲げて

跳躍する

「キヤアアアアアア！！？微速微速微速微速！！！」

速度が尋常ではなかった

椿の予想の遥か上の微速であった

一回の跳躍で、二キロほど離れた場所に着地する

対峙するは三人の盗賊

「災厄か!!?」

盗賊達は一目で飛影が何なのか理解する

構えて殺気を放つ盗賊達

「あはは!! 死ぬ!!」

「…死ぬ」

笑う飛影と死にそうなほど顔が真っ青な椿

椿の力が緩み飛影の背中から落下

落下するまでには盗賊三人の細切れが出来上がっていた

「あっ…」

「馬鹿なの!!?」

街の場所を知りたいのに殺してしまっただけは意味がない

死人に口無しとはこのことである

「…どうも殺気に反応する…」

椿に頭をバシバシと叩かれながら考える飛影

それはしょうがないことではあるのだ

いつ殺されてもおかしくないこの場所に5年間いたのである

殺気や敵意に反応するようになってしまっている

「飛影くん我慢だよ!!」

「…努力する」

再び飛影は索敵範囲を広げる

再び発見する

「もっとゆっくり!! 私が死ぬから!!」

椿が念を押して再び飛影にしがみつく

飛影は椿の言葉を考慮して跳躍する

割とゆっくりめに

「まだ速いまだ速い!! ゆっくりだって!! ゆっくりだってええええ!!」

「…他に知らん」

「むゝ…あっ！！じゃああれ焼いて！！」

椿が指差すのは空を飛ぶ鳥

不思議なものである

飛影は跳躍しながら考える

この二日で27回程盗賊を殺してきた

どの盗賊も殺意や敵意、そして恐怖があった

なのに椿という少女はそんな飛影のことを恐がりもせず、逆にパシらせる始末である

ただの人間の少女

(…意味がわからない)

飛影は飛んでいた鳥を鷺掴みにして首の骨を折る

《炎舞》

着地するまでに前進を炎で焼き尽くす

鳥の丸焼きの完成である

「ほら」

今しがた調理したばかりの鳥肉を椿に投げ渡す

「熱い!!」

飛影が素手で掴んでいたため椿も素手で受け取ったが当然熱い

うっかり離しそうになったが服を使ってなんとか持つ

「ありがとう飛影くん!!」

満面の笑顔

美味しそうに頬張っている

「…一つ聞きたい…」

「…なに？」

「なんでお前俺に接することができるんだ？」

飛影は考えても仕方がないと直接聞いてみることにした

「…?…言ってる意味がわからないよ？」

しかし、椿には伝わらない

「盗賊はみんな俺に殺意や敵意、恐怖を持つ。俺は災厄で殺されるのがわかってるから…でもお前違う…恐がらない…なんで？」

拙い言葉でだが、わかりやすいように言い換えて疑問をぶつける

それは椿に伝わった

「うーん…」

何かを考える仕草をしながら鳥肉を頬張る

「なんで…って言われてもなあ」

言葉にしづらいのかなか返答がでない椿

飛影はそれを人肉を食べながら座って待っている

「私には他の人が飛影くんを恐がる理由がわからないよ」

「は？」

「飛影くんは優しいただの男の子だよ？恐がる理由が無いよ」

「お前…頭は正常なのか？」

優しい男の子が盗賊を笑いながら殺す

ただの男の子が盗賊を殺し尽くす

そんなことを思っているのであれば飛影の言う通りに椿の頭はイカれている

「ひどいっ！！？…だって飛影くん優しいもん！！ただ常識を知ら

ないだけ：目の奥が優しい！！太陽みたいに暖かい！！それだけだよ：私が飛影くんを恐がらない理由は：だって優しい子に恐がる必要無いでしょ？」

素で言っていた

盗賊から恐れられていることや盗賊を殺す飛影だが、椿は自身の感覚で決めていた

「それ：だけ？」

「うん、飛影くんは優しいからすぐに殺さないようにできるよ！！」

災厄の子ではなく一人の男の子として見ている椿

なぜか納得してしまった

変な答えで飛影自身も理解できないが、納得してしまったのだ

椿は嘘を言っていない本心からの答えで飛影は納得してしまった

「：まあいい、行くぞ」

「はーい」

さすがに27回も移動していたら、椿の言うペースで移動することができるようになった飛影

木々に乗り移りながら盗賊達に向かう

そこにいたのは四人の盗賊

「あははは!!」

着地して椿を放り投げる

「災厄だ!!?」

そして殺気や敵意を飛影に放つ盗賊達

飛影が刀を抜いた瞬間に三人は細切れになった

殺された三人は殺されたことすら理解していないで死んでいく

そして残りの一人

恐怖で染まった顔の男

飛影は刀を投げ放ち盗賊の腹に突き刺さり吹き飛ばして木に張り付ける

「がっ…!!」

腹に刀が突き刺さり木に縫い止められていて身動きが取れない盗賊

「あっ…できた…?」

「できた!!?…やったね飛影くん!!」

飛影の手を掴み万歳する椿

飛影もできたことに驚いていた

ぎりぎり即死ではない攻撃を放った

「くそ…殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる！」

刀はどうやっても抜けず恨みを言葉にするしかない盗賊

「…おい」

「…ひっ!!?」

しかしそれも飛影の一睨みで終わる

「街はどこだ？」

「…え?…街ですか!?!…街はここから南の方角にあります」

「そうか…」

飛影は刀を抜き、盗賊が地面に落下する

そして首を跳ねた

「街はあっち」

飛影は刀を納めて指で方角を示す

「それじゃあ行ってみよう!!」

椿はそれに反応しない

盗賊は悪者

だから死んでも構わないと考えている椿

ただの女の子ではなく椿も狂っているだけなのだ

街へ（後書き）

2,000PV

500ユニーク突破です。

見ていただきありがとうございます。

ジソフ国到着（前書き）

なんとか更新速度が戻りそうです：

今回は飛影と椿が街に繰り出します

ジソフ国到着

40キロほど南に向かってついに街についた飛影と椿

「うわぁ〜大きい!!」

立派な城

賑わっている城下町

椿ははしゃぎながら噴水を眺めていた

「人が多い!!」

「獲物が多い」

同じ人が多いという感想だが、飛影と椿では表現が違っていた

飛影がニヤリと笑みをを見せて今にも斬りかかりそうな雰囲気を出す

「ストップ危険思考!!」

椿は問答無用のハイキックを飛影に食らわせる

だが当然のように飛影には効かない

「殺すの禁止!!」

「何故？」

当たり前前なのが飛影にはわからない

「とにかく駄目！ここにいるのは普通の人だから！」

椿の基準では悪いことするのはOK

普通の人はNGということである

「…わからんが、まあそうしよう」

飛影は本当にわからないがとりあえずで領いた

「それで…どうするんだ？」

「とりあえず…泊まるところ探そう！！」

まずは楽しむための拠点が必要だと椿は判断して宿を探すことにした

この国の名前はジソフ

小国であるが遺跡の森に一番近い国として盗賊やトレジャーハンターが数多くこの国を根城にしている

盗賊達にとってもこの国を襲うメリットは無く

宝を売ったり、食料を購入したりと遺跡の森によって国が繁栄していた

貴重な宝があり、商人の行き来も激しく宿の数は多い

そのため宿を見つけるのに時間はかからなかった

「いらっしゃい…可愛い旅人と騎士さんかしら？お父さんかお母さんは？」

宿に入ると温厚そうな女将さんが出迎える

飛影は後ろに下がり全て椿に任せる態勢である

女将さんは飛影が背負っている刀をまさか本物とは思わず騎士ごっこでもしている少年だと思っている

「お父さんは商人で今仕事してるの！！私と飛影くんはお留守番で宿に泊まっておいてって」

即興の嘘

女将さんは人が良いのかそれを信じる

初めてのお使いだろうと考えていた

「そうなの…偉いわねえ…大人一人子供二人でいいかしら？」

「お父さんは仕事先で泊まり掛けだから子供二人で！！」

「じゃあ二人で9,000Gね」

ここで余談だが9,000Gとは簡単に言えば9,000円のことである

「おい：俺お金は無いぞ」

「ええ！！？」

払おうと飛影を呼ぼうとした椿に飛影は衝撃の真実を伝える

飛影は基本的に魔法の道具しか集めない

一応は宝石や金もコートに入っているが、お金はもっていなかった

「あら？もしかしてお父さんが渡し忘れたのかしら？」

女将さんとしても判断に困っていた

さすがに子供二人を路上に放置はできないので父親が来た時に会計しようと考えていたところで

「これならある」

飛影が金の粒を10個程カウンターに出す

「…」

女将さんの時が止まる

目を丸くする女将さん

その様子を見て飛影と椿は足りないと判断した

「…飛影くん：足りないみたいだから：まだある？えっと…お父さ

んからもらったそれ」

「…ん」

再び10個追加される

「いやいやいやいや！！そんなにいらないわよ！！これだけで充分」

女将さんが取ったのは一粒だけ

「…これだけでいいんですか？」

椿も飛影も価値がわからない

飛影がわかるのは魔法の道具の価値だけである

塵芥程の魔力しか感じない石ころ

それが飛影にとっての金の粒の価値である

「充分さ！！けっこう良いとこの商人の子供なんだねえ」

お釣りをいくつか貰い飛影はコートのポケットに無造作に入れる

部屋に案内される

子供二人が使用するには広すぎる部屋であった

「わあゝ！！！」

ベッドにダイブする椿

今までが土の上や草の上で寝ていたためふかふかの布団に感動を覚える

「凄いよ飛影くん!!これふかふか!!」

その場で跳び跳ねる椿

「…」

しかし飛影はそれを眺めているだけである

もともと荷物などない二人

宿を取る意味はあまりなかったが、作戦会議を行うことで有用性をもたせることにした

「とりあえず…私は料理と服を買いたいな」

「特になし」

終了

僅か10秒で作戦会議が終了する

「あゝ…お金のこともわからなきゃね…」

無理矢理作戦会議を長引かせる

「ん」

知識が恐ろしいほど無いことを実感した椿

覚えておいて損はないと確信する

「とりあえず金の粒をお金に換えよ？」

「それもそうだな…」

「問題は足元見られるかもってところかな…」

子供二人が換金しにいつでも正しい価値をわからないからと思われかなり安くされそう

椿の予想は大当りである

二人だけで行けば正規の換金の7割は削られる

「宿の人に聞いてみるとかどう？」

「知らんお前に任せた」

飛影は正しく自分のことを理解していた

聞いたら殺す

先程危険思考ストップを椿から言い渡されたため飛影は自重する

「投げやり!!?」

「これだったらいくらでも使ってい」

飛影はポケットから金の粒の山を取り出す

小さな子供の一握り

「量はある」

ポケットの中にはその20倍以上が入っている

「俺にとって価値がないから使えばいい」

飛影にとっての価値は魔法の道具である

石ころはいらないという考え

「わかった」

他にも大量の宝石や金塊を所持しているが飛影にとってお金になり
のは金の粒という解釈である

売るところに売れば軽く国家予算クラスはある飛影

「とりあえずこれ一粒で宿に泊まれるから、換金しないでこのまま
でいいよね」

恐ろしいことを言い出した椿

「いいぞ」

そしてそれに頷く飛影

椿が言っていることは10円のを一万円で払って

釣りはいらねえとっときな!!

と、常時買うたびに言うということである

散財にも限度があるだろうとツツコミを入れる者がいない現状

カオスである

「それじゃあ行こ」

「ん」

そして彼等はジソフの街に繰り出した

それは初めて災厄の子である飛影が街に繰り出した日であり、この国ジソフが減びた日でもある

ジソフ国到着（後書き）

なかなかこの飛影ですとはちやめちやにしくいですね…

早くアホにしなければ…

ジソフ国滅亡（前書き）

少しダークです

ジソフ国滅亡

「あっ！！飛影くんあれ美味しそう！！」

「…」

はしゃぐ椿を先頭に飛影はついていく

飛影としても目新しいものばかりで視界は一点に集中することがない

周りからは微笑ましい光景であった

椿が指差したのはホットドッグのようにパンに肉を挟んだもの

「おじさん二つ頂戴！！」

幸せそうな笑顔の椿

「はいよお嬢ちゃん…300Gだ！！」

「これで！！」

たった300G

それを椿は金の粒で払う

「…」

目を丸くして時が止まる屋台の主人

さすがに貰えないと時が動いた時にはすでにいなかった

「どうだ！！飛影くんこれが料理だよ！！」

人肉では無い食べ物

ファーストフードのようなものを料理と呼ぶかは不明だがまともな食べ物であることは確かである

自分が作ったわけではないが、胸を張って飛影が食べるのを待つ

「ん…」

どうやら飛影の口にあったようで、すぐに一つ平らげる

「どう？」

「うまい」

「やったー！！私の勝ち！！」

万歳して再びはしゃぐ椿

勝負事になった記憶は無い飛影だがどうやら負けたらしい

「これ作れる！！？」

「わからない…」

飛影としても気に入ったため作れるなら作ろうと考えるが調理方法がわからない

「うゝ残念…あっ!!? 飛影くんあれ食べよ!!」

次に椿が発見したのは水飴である

椿は聞いてはいるが疑問系ではなく飛影の返事を聞く前に屋台に突撃する

「…」

本心から渋々といった様子で飛影はそれに追従する

「おじさん二つ頂戴!!」

そして再び椿は金の粒で支払う

「買ってきたよ!! 食べよ?」

「ん」

一つを飛影に渡す椿

木の串が二本水飴に突き刺さっている

「どうやって食べるんだろ?」

色々な角度で観察する椿を横目に飛影は水飴を一口で頬張る

もともと水飴は少量を口に含むものである

「脳みtainな食感」

ネチャネチャと口の中に残り食べづらそうな飛影

「…食べる前にそういうこと言わないでよ!!?」

まだ食べていなかった椿にとってひどく食べるのが億劫になる感想である

舐めるように少量を恐る恐ると含む

「甘くて美味しい!!これ少しずつ食べるんじゃないの?」

すぐに口で溶けて飛影の言う脳みtainな食感はない

「やった勝った!!飛影くん罰ゲーム!!」

「?」

勝負になったことも初めて聞いたことでありしかも罰ゲーム性であった

「じゃあ私のことを名前で呼ぶこと!!」

飛影と会ってから少し経つが一度もまだ名前で呼ばれていない椿

名前で呼ばせよう名前で呼ばせようと内心ずっと考えていたことである

「…意味がわからない」

一蹴

「…うう」

その場で崩れ落ちる椿

椿が勘違いしたことだが飛影の意味がわからないは名前を呼ぶことではなく罰ゲームの意味がわからないということである

「もういいもん！！服屋行こ！！服屋！」

頬を膨らませてかなり不機嫌である

飛影は何に怒っているのか意味がわからないがそれについていく

「いらっしやいませ…あら可愛らしいお客さんね」

優しい笑顔で迎える女性店員

「凄い！！服がいっぱい！！」

様々な服があり椿の眼が輝いている

「…」

しかし飛影は興味無さげにそれを眺める

「こちらなんてお似合いですよ？」

子供用の服もあり店員は椿に似合いそうなものを見繕う

「ふわああ!!?」

さすがに子供二人のためお客さんだとは思っていない女性店員

しかし暇なのもあり可愛らしい少女が来たため色々を見繕うとして
いる

30分後

「ねえねえ飛影くん!!これどうかな!!?」

試着させてもらった服を飛影に見せびらかす椿

くるりと回って御機嫌である

「知らん」

一蹴

再び崩れ落ちる椿

「くっそ!!」

しかしすぐに復活して再び女性店員と服を考える

一時間後

「これどう!!?」

「知らん」

悩みに悩んだ一品を一蹴された椿

完全に崩れ落ちる

しかし飛影も一時間待たされて文句も言わないのは立派である

「ひらひらしたのじゃなくて動きやすいのにしろ」

ついに一時間も突っ立っていた飛影が動いた

てきとうに無造作に選び椿が最後に着た服と同じものを選んで椿の頭に乗せる

「ありがとう飛影くん!!」

すぐに復活して太陽のような笑顔を見せる

「お姉さんこれ買います!!」

再び金の粒でお会計する椿

女性店員の時が止まった

「ありがとう飛影くん!!」

店から出て再び礼を言う椿

ここまでは順調であった

国も飛影と椿も

少し歩いた時に五人の男に囲まれた飛影と椿

「坊主たちいっぱいお金あるんだって？お兄ちゃん達に恵んでくれないかなあ!？」

ジソフは遺跡の森に一番近い国

当然盗賊も多い

椿は金で支払いをしすぎたのだ

子供二人が大金を持っている

それだけで盗賊が狙う理由になる

盗賊に囲まれた子供を街の者は見てみぬ振りをする

誰だって蜂の巣は突つつきたくない

「えっと…」

先頭を歩いていた椿は当然男達から近い位置にいて一歩下がる

「いいだろ？いっぱい持ってるんだから」

そんな椿を見て更に一步近付く男

「…」

ゆっくりと飛影の手が背の刀に向かう

「駄目！！！！…飛影くんそれは駄目！！」

飛影のその行動が何を意味するか

椿には理解できた

盗賊ではなく飛影を制止させる

「なんで？」

飛影には椿が止める理由がわからない

「なんだ坊っちゃん？戦おうってか？」

手は刀を掴んで止まる

盗賊が嘗めているように笑う

「…殺す」

飛影の感情が鎮まる

それは嵐の前の静けさのようであった

「駄目!!」

飛影の身体を抑えて無理矢理止めようとする椿

ポケットに入れてた金の粒一握り

全てを盗賊に投げつける

「それで全部!! だから放っておいてよ!!」

このままじゃ不味い

それは理解できたことで椿には盗賊達を離すことしか考えていない

しかし、盗賊達はその椿の態度にムカついたようで地面にばら蒔かれた金の粒を拾おうとはしない

「おいおい嬢ちゃん…ちゃんと手渡してくれよ」

「…っ」

飛影は今ぎりぎりのラインで踏みとどまっている

椿がいることで抑止力になっているということは無いが、離したら大変なことになると感じていた

「ほら早くしろよ!!」

いつまでも動かない椿に一人の盗賊が腕を伸ばす

「駄目!! 近付かないで!!」

椿の必死の呼び掛けも意味がなく

「あは…」

狂気の笑い声が発せられた

「ひえ」

椿が名前を呼ぶ前に飛影は刀を抜いて腕を切り落としていた

「あっ？」

盗賊の男が腕を切り落とされたことに気付いて痛覚が痛みを訴える前に

「あはは!!」

首が吹き飛んでいた

「このガ」

逸早く飛影が何をやったのか理解した盗賊が動く前に

「キ」

身体は両断されていた

「…このガキ災厄だ！！？」

「なんだあぐ！！？」

喋りかけた盗賊の顔が飛影に掴まれる

「あはははは！！！！！」

握り潰す

脳漿と血液が周囲に拡散する

「災厄だ！！このガキは災厄だあ！！！」

「なんでこの街に来やがっ！！！」

騒ぎ立てる盗賊達

ここは遺跡の森に一番近い国

つまり災厄の子である飛影の噂も一番拡がっている国だ

逃げようとした盗賊二人が無造作に殴り付けられて爆散する

一瞬の静寂

「あはは！！！」

飛影が笑うと同時

『いやああああああ!!?!?』

複数人が恐怖の叫び声を上げて逃げ惑う

周囲はパニックになった

中には石を飛影に投げつけるものや、鍛冶屋から武器を持ち出すもの
城に報告するものがいた

女子供は逃げ惑い、腕つぶしに自信がある者や盗賊は武器を構える

その者達から発せられるのは敵意や殺意、恐怖に憎悪である

「飛影くん止めて!!!」

一歩前進した飛影を椿は背中から掴んで何とか止めようとする

「死ね災厄!!!」

「来るなガキ!!!」

「早く殺してくれよ!!!」

「生きてるんじゃないよ!!!」

近付くのは恐いのか物を投げていく

それらは飛影には全く通じないものである

「なんでそんなこと言うの!!?!?盗賊が襲ってきたのに助けてくれ
なかったのはあなた達じゃない!!!」

椿としてもこの対応には納得がいかない

最初から助けてくれればこんなことにならなかったし

盗賊を殺したからといって責められる理由がない

「そいつが災厄だからだ!!」

「生きてるだけで災厄を呼び込むガキは殺すのが当然だろ!!」

「俺の息子が火事でなくなったのもテメエのせいだろうが!!」

集団心理

どうしようもなく捌け口がない場合、人は捌け口を探す

台風で畑が駄目になった

落雷で動物が死んだ

謎の病気で死んだ

恋人と別れたなどと軽いものまで、災厄という存在は全ての負の感情の捌け口になる

そして噂が一人歩きして、一人が言った瞬間にダムに塞き止められていたように人々の口からおぞましい程責められていた

「…」

飛影から笑いが消えた

城からの兵士や騎士も飛影を取り囲み殺気しかない

「…なんで?…飛影くん悪いことしてないのに…」

椿には信じられなかった

人間というものが理解できなくなった

「あう!!」

そして誰かの投石が椿の頭に直撃して頭から地を流しながら気絶する

「つば…き?」

飛影は刀をしまい、護るように椿を抱き寄せる

「…ふざ…けるな…」

ある意味での笑いしか感情が無かった飛影にある感情が芽生えつつあった

それは怒り

何故こんな目にあわなければいけないのか

何故ただの人間ごときにここまで言われなければならないのか

何故災厄でも魔王でもないただの少女である椿が傷つかなければならないのか

「…ふざけるなよ」

《炎舞》

ポツリと飛影は呟いた

同時に空が緑色に光る

緑色の炎が空を覆っていた

「骨も残さない…あはは…!!…お前ら全員死ねよ…!!…!!」

初めて出す叫びに似た大声

それを合図に空が落下した

正確には空を覆っていた緑色の炎である

城の兵の中には遺産持ちの魔法使いがいて空に魔法を放つが一瞬で消えていった

相殺でもなんでもない、ただ無意味な行動である

「あははははははは!!」

そして飛影の笑い声と国中の絶叫の中魔王の一撃はジソフ国の全てを焼き付くした

ジソフ国滅亡（後書き）

この事件をきっかけに飛影は普通の人間に無関心になります
接するだけ無駄だからです

時は流れ旅立ち（前書き）

国を滅ぼした飛影

あれから

時は流れ旅立ち

ジソフ国滅亡から5年後

飛影と椿はまだ遺跡の森にいた

「最後の遺跡、攻略完了」

遺跡の森にあった遺跡全てを攻略した飛影

10歳になり少し成長していた

身長は14センチほど

背負っていた刀は腰に挿していた

少し落ち着いた雰囲気のでている

「お帰りなさい！！ご飯よろしく！！」

遺跡の外で飛影を出迎える少女

椿も成長していた

成長速度が飛影と異なり外見は七歳程

身長は125センチほど

アホ毛は健在であった

「…自分で作れよ」

「いやゝあははは…飛影くんの方が上手だし」

あれから飛影と椿は試しながら料理をしていたが、椿の料理の腕は殺人級に下手で

椿の料理を食べた時に飛影は初めて災厄の子で良かったと思ってしまっただけの威力であった

「それで…どうするの飛影くん？」

てきとうな山菜は採っていた椿

飛影は石を投げて鳥を撃ち落とす

撃ち落とした刀を使って血を抜いて皮を剥ぐ

かなり慣れた手付きである

「なにが？」

「やることなくなったよ？」

この五年間

盗賊の数が激減した

年間に一人来るかどうか

国を一瞬で滅ぼした飛影

一番近い国が滅亡して補給ができなくなり、飛影という災厄の存在がいる遺跡の森に行こうなどと考えるものがいなくなったのだ

暇が潰せなくなった飛影は椿と共に遺跡の森をぶらついて、遺跡を発見したら攻略を繰り返していた

そして今日、全ての遺跡を攻略した

「村か町か街にいくか？」

「うーん…それしか無いからね…てきとうに旅でもしよ…目指すは世界一周!!」

ジソフの事件がありあまり気乗りはしない椿だがやることがないのも事実

「前はあっちだから今回はあっちでいいか？」

南を指差してから北を指差す飛影

「うん、そうしよ!!」

「わかった」

もはや長距離移動をするときには当然のように飛影の背中にしがみつく椿

「レッツゴー!!」

微速前進で北に向かう飛影

椿に負担をかけないように衝撃を殺しながら飛影は進む

五時間ほど走って250キロほど移動した飛影

少し肌寒くなってきた

飛影は疲れていないが椿に疲労が溜まってきたため止まる

途中で村はあったが、小さい村でつまらなそうという理由でノンス
トップで走っていたのだ

《炎舞》

飛影は空中に火を灯す

軽い焚き火である

「はぁゝあったまる…飛影くんありがとう!!」

椿は焚き火にあたり少し冷えた身体を暖める

「狩ってくる」

「いってらっしゃい」

飛影は感覚を拡げて生物を探す

しかし払げる必要はあまりなく、目の前に可愛い猫のような動物がいた

まだ子供なのか身体は小さい

お腹が減っているのか愛らしい眼でご飯をくださいと訴えていた

しかし飛影はナイフを取り出す

理由は食うためだ

「ストオオオップウ！！！！？何する気！！！！？大体想像つくけどさ！！」

全力で止めにかかる椿

「狩って食う」

しかし飛影はいたって冷静に無表情である

「あの可愛い動物を狩るの！！？そして食べるの！！？飛影くんの鬼！！悪魔！！人でなし！！」

椿はドン引きであった

「俺はお前の基準がわからん」

飛影としては可愛いとか食用とかの基準はなく全て一括りで獲物である

「とにかく駄目駄目駄目駄目駄目！」

「…はあ」

飛影は溜め息を吐いて感覚を拡げる

「あれは駄目なんだな？」

飛影は愛くるしい動物を指差す

「絶対だめ！！」

「わかった」

飛影は頷いて感覚内にいた生物の元へと跳躍する

その先にいたのは飛影達の目の前にいた動物の親らしきもの

親らしきものもお腹を空かせているのか可愛らしい眼で懇願するようにご飯をくださいと訴えていた

「これはあれじゃないな」

飛影は少しだけその動物を観察して大きさが違うことを確認してナイフを投げる

綺麗に頭に直撃して突き刺さる

飛影は動物の首を鷲掴みにして椿のもとへと跳躍する

「おかえ…」

椿の時間が止まった

飛影が首根っこを掴んでいるのは確実に先程の可愛らしい動物の親であった

「このボケエエエ!!!!!!」

飛影の顔面にドロップキックが炸裂する

「!!!?」

お腹を空かせた椿に食材を持ってきたにも関わらず攻撃された飛影
僅かに目を丸くする

攻撃自体は効いていない

「殺すな言うたやろうがああ!!」

「喋りかたおかしいぞお前」

「やかましいはボケエ!!」

何故か地方弁になる椿

これがガタイの良い強面であったなら多少の威圧感を与えられるが、
外見は七歳の女の子が行っても威圧感などなく可愛らしいだけであ

るが

災厄の子であり魔王の飛影は今まで経験したことがない威圧感に襲われる

「座れ」

大変ご立腹な椿

顎で促す

何故座らなければならないのか、飛影は疑問に思うが身体が勝手にその場に座る

「狩っちゃだめって言ったよね？」

「…」

なにも言えない飛影

完全に蛇に睨まれたカエルである

「言ったよね？」

「…言ってた…けど」

「けど？」

「…なんでもない」

恐怖である

決して逆らう気が起きない恐怖が今飛影を襲っていた

「その可愛らしい子とさっきの可愛らしい子は同じだね？」

「大きさが違う」

飛影の言い分にぴくつと椿のこめかみが動いた

「…」

無言の圧力

「…」

なにも言えなくなる飛影

飛影は椿の笑顔が怖かった

「…はぁ」

椿の溜め息

圧力が消えた

「次やったら許さないからね…今回はもういいよ」

お許しを受けた飛影はそそくさと調理を行う

料理を覚えてきた飛影だが食材自体が無いため、綺麗に切り分けて焼くぐらいしかできないが見かけだけでも感じる味は変化するものだ

椿が調理する場合は綺麗だからという理由で花を混ぜたりして料理がゴミへと変わってしまう

基礎ができないくせにオリジナリティを求める典型的な料理が下手な者である

あれほど怒ったにも関わらず美味しい美味しいと食べる椿に飛影は疑問を感じたが、流すことにした

軽く食休みを取り、再び移動を始める

さらに50キロほど移動してそこは銀色の世界だった

「すごい！！綺麗！！でももの凄い寒い！！尋常じゃないくらい寒い！！！」

椿の格好は飛影がジソフの国で買った森用に動きやすい生地が薄い長袖と長ズボンに革靴である

飛影達が向かう方向にあるのは雪国であり、自然を嘗めてるとしか思えない格好だ

飛影は同じような服にコートを着ているだけだが特に寒いと感じない

種族としての差と魔力量による差である

魔力には様々な耐性があり、普段飛影が垂れ流している魔力で自然が作り出すような暑さや寒さは特に感じることはない

普段飛影が椿にドロップキックを食らっても無傷なのは垂れ流している魔力だけで防げるものだからである

イメージ的には透明な膜を纏っているものである

「…」

《炎舞》

炎が一瞬だけ椿を包み込んだ

「ひょえわ!!?」

一瞬だけであったが驚くのは無理もない

身体は全く焼けずに寒さが消えたのだ

「お前…うるさい」

炎による耐寒の結界

ただ寒さを防ぐだけであるが椿にとってはありがたいことこの上ない

「ありがとう飛影くん!!」

そんなこんなで突き進む飛影達

15キロほど進みようやく街が見えた

そこは絶対零度の雪と氷の大国
アイステンペスト

ここで飛影と椿は常識を知ることになり

椿は友達ができて

飛影は魔王として名を馳せる

時は流れ旅立ち（後書き）

この国ではあくまでも椿の友達ができます

再会（前書き）

アイステンペストに着いた飛影と椿

彼らは何をするのか、

再会

銀色の世界

雪が降り積もっていたが何故か国を囲む門から雪は積もっていなかった

飛影達がいるのは正門

積もっていた雪がある境界から無くなっている

見分けかたは簡単に積もっているかいなか

「なんで雪が積もって無いんだろう？」

椿の疑問

飛影は積もっている場所から手を伸ばす

「結界」

挟間に強力な透明な結界が張られており、その結界が雪が積もるのを阻害していた

「…これは驚いた…子供二人でここまで来たのか!？」

正門には門番がいた

商人や護衛や親の姿は周囲に無い

アイステンペストまでの道のりは一番近い国からなら楽だが子供が来れるほどでは当然無い

雪山にあるこの国はただ登山するのとは勝手が違う

そしてなによりその軽装

雪山の装備は無く薄手のとてもじゃないが雪山に適しているとはお世辞にも言えない軽装

「それって凄いの？」

しかし飛影には苦ではないし、椿は飛影に背負われていたのでそれが凄いことだとは思わない

「凄いね…さっきも、君らより少し歳上の女の子が一人で来てたし、もしかして二人はトーナメント参加者かな？」

「トーナメントって？」

会話は全て椿に任せて飛影は結界の境界に手を伸ばしたり引っ込みたりして構造を確認していた

理由は暇だから

「男女の二人でチームを組んで戦うんだ、優勝者には賞金と副賞として貴重なナイフがもらえる…だから今は参加者と観戦者で人が賑わっているよ」

人が良いのか、子供にも親切な対応をする門番

貴重なナイフ

その言葉に飛影は惹かれた

「それに出る。どうすればいい」

「簡単だよ、中央広場に受付所があるからそこで力を見せて合格すればいい」

門番の言葉に飛影はにやりと笑い

門を潜り抜ける

「待ってよ飛影くん!!?」

椿もそれを追いかける

「二人とも基準値以上じゃなきゃ駄目なんだけど…って遅いか」

重要なことを伝える前に飛影達は行ってしまった

「雪が積もっていないね」

国の中は結界の中のため雪は積もっていなかった

逆に春のように暖かい

雪と氷の国であるアイステンペストだが、住み続けるためには必要

な措置なのであろう

「…」

飛影はそんな椿の感想には耳を貸さず、止まらず歩き続ける

門番の言う通り人が多く賑わっていた

男女が一緒にいるのが多く、参加者が多いことの証明でもあった

「あぶっ!!」

二人とも人混みに慣れておらず椿は人にぶつかりながら進むが、飛影はひよいひよいとぶつかることなく進む

そして中央広場にたどり着いた飛影

そこにも人が多く飛影は殺したくなる衝動にかられるが何とか我慢する

受付所に進もうとした飛影だが、あることに気付く

「…あいつは？」

椿がいなくなっていた

「っ」

これでは登録ができないと飛影は舌打ちする

ナイフのことしか頭になかったのが原因だ

椿を探そうと感覚を拡張しようとした時

「あら？ あらあら？」

聞いた覚えのある声が聞こえた

そして挨拶のように軽く殺気をぶつけられた飛影

ザワ：

と心が震えたことを実感した飛影

「！！？」

すぐに振り返る

そこには飛影と初めて共闘した飛影よりも強い化物の少女

盗賊の静紅がいた

「：また、会ったわね」

ニコニコと微笑んでいる姿は変わらない

身長が伸びて140センチ程

外見も年相応の9歳程の姿をしていた

「また、会ったな、殺し会う…か？」

開口一番の言葉

「止めとくわ…それより貴方、名前はできた？」

災厄の子が飛影になった理由

それを作った静紅

「…飛影」

「できたのね！！良い名前だわ…それじゃ飛影君、また契約しない？…契約内容はこの大会と一緒に参加して優勝すること」

静紅も丁度ペアがいなかったのだ

もともと静紅は共闘すると被害が味方まで及び殺してしまうため優勝した者を殺そうかと考えていたところである

「いいぞ…宝はどうする？」

「…この賞品デスパラシリーズなのよ…だから魔剣の一刀あげるわ」

賞品のナイフは静紅が収集しているデスパラシリーズのナイフである

静紅としても譲る気は無い

「魔剣の一刀？」

「飛影君が持っているその刀…」

静紅が指差すのは飛影の腰に差してある黒く黒い刀

「それが魔剣…十全の魔剣、少しだけ調べたのよ?…とりあえず損はしないことは確かだけど、これ以上の情報は有料よ?」

飛影は魔剣を見る

静紅の言葉から想像ついたのは、この刀があと九振りあるということ

この刀が強くなること

飛影が普通に使っていて刃こぼれもしない
切れ味が落ちない刀

飛影が試しに他の武器を使った時には飛影の力に耐えきれず武器が破壊された

この刀だけが飛影が扱える唯一の刀

「…」

飛影はポケットからてきとうに宝を探して静紅へ放る

「ふふ…ありがとぶ!!?」

華麗にキャッチしたとこまでは完璧だったが、脚がもつれてその場で転ぶ

「…」

「…飛影君の投げた場所が悪いのよ!!」

黙ってみていた飛影のせいにする静紅

アホな所は変わっていない

「それでいいか？」

飛影はそれをスルー

「うう…これライルね…まあいいわよ」

飛影が渡したのはガラスの玉である

それは魔法の道具の一つで

効果は魔力を込めると光る

ただそれだけであるが、天井や壁にくっつけることができて壊れるまで再利用可能

また、魔力を込める量によって光量が変化するのも特徴である

使い方次第では目眩ましにもなるライルである

「ただあとこれ9個ね」

ニツコリと微笑む静紅

ライルの使用法は基本的に洞窟などでの道標である

一個だけでは意味があまり無い

「…」

飛影は頷いて残り九個を渡す

ポケットの中に500以上あるため気にしないのである

「魔剣っていうのは、全容はわからないのだけど…絶対強者級が作った剣で、十全の剣と呼ばれてるわ…一刀一刀に能力があって十刀全部集めると強力な剣になるらしいわ…飛影君の持っているのは恐らく熱性の剣。とにかく刀が変形しないように熱に強い…私が持っているのは硬性の剣。とにかく固いの…それで残りの八刀は「斬性」「融性」「伸性」「変性」「人性」「知性」「耐性」「魔性」各其々長所があるみたい…私を知っているのはこのぐらい…今特に目的がないのなら集めてみるのもいいかもしれないわね」

「…そうする」

素直に頷く飛影

話を聞いていると興味が沸いてきたのだ

「それじゃあ報酬にも満足してもらったなら…参加しましょ」

静紅は微笑みながら飛影の手をとって受付所まで歩く

受付所は数が多いためか少しおざなりになっており、登録用紙の紙が置いてあり書けたら所定の場所で実力を測ることになっていた

「おい…俺文字書けないぞ」

口頭ですむと思っていた飛影

「ふふふ…私がわかるから大丈夫よ」

誇らしげに自慢する静紅

お姉さんアピールができると内心は歓喜であった

「…」

静紅と一緒に参加できることは飛影にとって利点しかない

椿と一緒に参加は二人とも文字がわからずに、参加すらできなかったのだ

ちなみであるが今の飛影に椿を探しに行くという選択肢は存在していない

「え」と書くので必須は…名前と年齢と性別で…あら？必須ではないけれど称号とか通り名もあるみたい…」

静紅は人通り上から下まで読む

全体的には参加者の情報と

怪我しても自己責任です。という誓約書であった

鼻歌混じりに静紅は必須の箇所を記述していく

「名前はく飛影君だから飛影、年齢は…？」

さっそく躓いた静紅

飛影の年齢がわからない

外見的には大体はわかるのだが正確な年齢は把握していなかった

クルリと振り返り後ろにいた飛影に訊ねた

「7年生きてる」

返答はすぐにもらえて静紅は七歳と記述して続きにかかる

「性別は男で…称号は魔王…と」

飛影の分の欄が埋め終わる

称号にわざわざ魔王と書いたのは飛影のためである

静紅の耳にもジソフ滅亡の情報は入っていて、やったのは災厄の子
としか流れておらず魔王という言葉聞いていなかった

静紅が化物と呼ばれたくないように、静紅は飛影のことも災厄と呼
ばせたくないのだ

だから魔王として周知させることも目的にあった

「次は静紅、九歳、女の子…ふふ…できたわ」

バツと書き終わったのを飛影に見せる静紅

飛影にとってなんて書いてあれるからわからないが埋まっているのを見て頷いた

そして一陣の風が吹く

「あ…」

紙が静紅の手から離れて空を舞う

「馬鹿だろお前」

「ひどい!!」

飛影は少し屈んで、目標に向けて跳ぶ

難なくキャッチした飛影は着地して静紅に突き出す

「あらあら…さすがね」

静紅が受け取ろうとして

「…」

飛影は受け取られる前に手を引っ込める

「あら？」

「お前、またなんかやらかすから俺が持つておく」

飛影のその予想は正しい

所定の場所まで100メートルも無いが静紅なら二回は確実に何かをやらかす

「わ：私はそんなドジじゃ無いわよお！！」

移動が終わる

係員に紙を渡して案内されたのは大きなテントであった

中にいた係員は女性で不合格になった選手が暴れるのを抑えるため、実力があるものが選ばれる

「：こちらの水晶に触れてください、魔力を数値化します。5000以上で合格で本選に進めます」

営業スマイルを浮かべる係員

飛影と静紅が子供でも態度は他の選手と変わらない

むしろ他の選手よりも態度は良い

理由は簡単だ

飛影と静紅

魔力を抑えているが、垂れ流しの魔力だけで係員に圧迫感を与えている

まるで心臓を握られている感覚である

「触ればいいのよね…」

静紅は特に魔力を解放することなく水晶に触れる

魔力を数値化する水晶は解放されている魔力を測ることができる

つまり、普段静紅や飛影が垂れ流している魔力が数値化される

値は三万

「!!？」

「次は飛影君よ」

「ん」

予想していたとはいえあまりにもふざけている結果に思考が停止してしまった係員

その間に飛影は水晶に触れる

結果は当然二万六千

静紅には劣るものの充分すぎる記録である

すでに合格しているものの中では三万を超える者も珍しくない

しかし全魔力を解放して三万を超える

越えたものはどこか誇らしげな表情であるが

飛影や静紅は一切解放しておらずまるで当然のような反応である

「それじゃあ合格ね…詳細は？」

「あ…はい、本選は三日後の昼の一時からスタートになります。こちらがルールブックになりますのでご確認下さい」

係員は戸惑いながらも飛影と静紅に薄いパンフレットを渡す

「ありがとう」

終始笑顔の静紅と終始仏頂面な飛影はテントから出る

「飛影君、宿は？」

「知らない…本がいつぱいあるところに行く。文字を理解する」

「それじゃあ図書館ね」

一度来たことがある静紅

見せどころが来たと張り切って案内を開始して

辿り着いたのは一時間後であつた

図書館の位置は目と鼻の先で五分もかかるはずはなかったのだが一時間かかった

「ここが図書館で本がいっぱいあるわ…まあ本選が三日後だから三日後に合流で良いわよね？」

「いいぞ」

見渡す限り本という状況でも飛影は特に表情を変えることはない
てきとうな席に座る飛影

「とりあえず文字を覚えるならこれね…それじゃあ三日後に会いましょう」

静紅は飛影に辞書を渡すと図書館から出ていった

飛影も静紅も魔力探知を使えるため場所を決める必要はない

（始めるか…）

飛影は三日間全て本を読んでいた

閉館になったら一度外に出て再び侵入して

開館になったら一度外に出て侵入してを繰り返す

三日後には図書館の本全てが無くなっているという事件が発生した

が犯人は見つからなかった

再会（後書き）

本を盗んだのは当然飛影です

コートのポケットにせっせと入れていました

次話は椿です

友人（前書き）

迷子の迷子の椿ちゃん

困った時の一言は？

友人

「…あの野郎…どこ行ったあああ!!!!!!?」

椿は一人叫んだ

周りから妙な目で見られるが椿は叫ばずにはいられなかった

現在大絶賛迷子中

人並みに流されて飛影と別れてしまったのだ

「うゝ探しに来る気配なんて無いし…飛影くん私がいなきゃトーナメント参加できないのに」

同刻

飛影は静紅と再会していた

「とりあえず…金は持つてるから飢えることはないけど」

飛影から事前に金の粒と女将さんからもらったお金をもらっているため、宿の心配もない

しかしそれ以上に一人ぼっちという状況が精神衛生上辛いものがある
とりあえず広場に行けば合流できるだろうと椿は再び歩き出す

（飛影くんみたいな魔力探知とか教えてもらえば良かった）

そんなことを考えながら歩いていた椿

「あいた!!」

「きゃっ」

人とぶつかってしまった

同じ背丈のものがぶつかり椿は二年間の森生活で少しは遅しくなっていて軽く頭を抑えたただけだが

相手は踞って痛そうに頭を抑えていた

よく見ると同じ位の女の子であった

「ごめんなさい!! 大丈夫?」

同じように屈んで女の子の頭を擦ってあげた椿

「う…だ…大丈夫です。こちらこそ不注意でし」

「貴様あ!! この方を誰と心得る!!?」

少女が涙目ながら微笑み後ろにいた男が剣を抜き椿に向ける

「ほえ!!?」

驚きながらも両手を上げて精一杯害がないことを示す

「止めなさいシュガー!! 相手は私と同じ年くらいの子よ!!」

一喝

先程までの弱々しい気配は消える

「はっ!! 申し訳ありません!!」

シュガーと呼ばれた男はすぐさま剣をしまい後ろに仕える

「…部下が失礼をしました…怖くありませんでしたか!？」

女の子に剣を向けるなど恐怖を与えてしまう

焦りながら少女は椿の眼を見るが

「ん? 全然大丈夫♪あれぐらいは慣れちゃった」

その笑顔は心配してくれてる少女を安心させる笑顔で無理をしていないことは一目瞭然であった

「慣れちゃった…?」

あまりにも自然にさらっと凄いことを言った椿に少女は眼を丸くする

「いや〜いろいろあってね〜」

あははと笑う椿

数自体は少ないが二年間も盗賊に飛影のついでで狙われてきたり、

動物に狙われてきたりした椿はもうあれぐらいのことは慣れてしま
った

「うふふ…面白いです」

上品に笑う少女

格好はわざとらしいほど質素な格好

「あはは…王女様に褒められると照れちゃうよ」

「っ！！？なぜそれを？えっと…私の変装完璧だと思うんですけど」

本人的には少し貧しい街の少女にしか見られないと思っていたのだ

格好もかなり汚れた外套に少しボロボロな服

「えっとね…まず、髪が綺麗」

外套で頭も隠していたが、椿とぶつかってしまい綺麗な手入れが行
き届いた銀に近い白色の長い髪が露になっていた

「あ…」

椿からの指摘で今気付いた少女は慌てて外套で頭を隠す

「次に顔とか手とか肌が綺麗」

わざとらしいほど質素な格好に反比例して絹のように白い肌、汚れ
ていない可愛い顔に綺麗なブルーアイを指摘する

「う…」

「それと服がわざとらしすぎる…年代的な使い込んだ感がない」

椿は自分の服を見せる

所々破れていて、土が染み付いたかなり年季の入った服

「だめ押しは後ろの騎士さん…この方を誰と心得る…とか剣が綺麗だし、態度もなんかイメージ的に騎士っぽい」

「…」

椿の指摘に少女は恨めしそうにシュガーを見る

「…」

必死に眼を逸らすシュガー

「…私はスノウ・アイステンペストです。この国の第二王女です」

どこか諦めたようなスノウ

お忍びで城下町に来ている理由は友達を作りたいからである

王女という称号は同じ子供相手でも遠慮がちになってしまう

「私は椿、名字は無いの！！だから椿って呼んでね！！よろしくスノウ」

しかし椿の態度は何一つ変わらない

もともと飛影よりかはまだ常識がある程度の椿

礼儀など最小限にしか無い

人によっては無礼とか失礼とか言うことかもしれないがスノウにとってはそれが嬉しい

「っ…椿？」

緊張した面持ちでスノウは椿の名を呼ぶ

初めて同年代の者を呼び捨てにした瞬間である

しかしなかなか返事がこない

何か失礼なことをしたかと慌てるスノウだが椿は記憶を読み返しているだけである

（私…名前で呼ばれたの…初めてだ!!?）

ジソフ滅亡時に飛影が呼んだのだが気絶していたため、椿の意識があるなかで名前を呼ばれたのは初めてである

「なにスノウ!!?」

一種の感動である

「椿…私とお茶をしませんか？」

初めてのお誘いをするスノウ

「喜んで」

初めてのお誘いを受ける椿

後ろにいた護衛のシュガーは目頭を抑えて感動にうちひしがれていた
これが椿にとっての初めての友達である

(…飛影くんは…いっか!!)

あまりの感動に飛影を探すという選択肢は消えていた

こうして椿は城に案内された

この国がおおらかなのか椿は普通に城に入ることができた

「うまっ!!? なにこれ!!?」

お茶といってもミルクティにクッキーだが全てが椿にとって初めての物である

「うふふ…クッキーっていうの」

その様子を嬉しそうに笑いながら説明していくスノウ

「椿は見ない服だけど旅人かしら?」

「旅人っていうかなんだろ？放浪人？」

とりあえず目的を世界一周と決めてるだけでただブラブラしてるだけである

「この国の滞在はとりあえず三日は確定してる…と思う」

「三日…ですか…」

思ったよりも短い滞在時間

「お父上は商人ですか？」

少女を連れて放浪するなら、商人しか思い浮かばないスノウ

「ううん…残念ながら馬鹿と旅してる」

「馬鹿？」

その物言いに思考がどうトチ狂ったかは不明だが護衛を連れての旅をしている高貴な生まれのものだと解釈したスノウ

「そう馬鹿…トーナメントに参加したいって感じだけど私がいなきゃトーナメント参加できないのに私のことを捜そうともしないの」

「…トーナメントに参加するの？」

「そのつもりだった」

あくまでも過去形である

もう知らんぷりを決め通すと椿の意思は固い

「姫様…大会参加者の情報です」

シュガーが紙の束をスノウに渡す

毎年恒例だがスノウはこの大会が好きだった

色んな者が色んな力を使い実力を見せる

それは世界を広げる良い機会なのだ

「ありがとう」

スノウは紙束を受け取り椿に渡そうとするが椿は首を振る

「私文字わからないの」

「そうなの？それじゃあ椿と共に行動している方の名前は？」

「飛影」

参加できてるとは思っていない椿

「…飛影さん…ですね、いました」

しかしすぐに発見するスノウ

「うそお!!?」

思わず身を乗り出してしまう椿

「七歳?...ごめんなさい同名な人でした」

スノウの椿の付き人の飛影は30歳ぐらいがイメージである

「ちょっとその飛影の情報を聞かせて!!?」

七歳ならば確実に椿の知っている飛影である

「飛影...七歳...男の子...称号...魔王?...魔力値二万六千...タッグを組むのは静紅...九歳...女の子...魔力値三万...」

「あの野郎お!! ちゃっかり参加してるよおお!! 静紅って誰よお!!」

何故かいきなり暴れだす椿

「このコンビ...かなり強いよ! 魔力値が万を越えてるなんて...」

スノウが受け取った紙束

魔力値が高い順に重なってありかなり上位のランクにいたため、すぐに発見できたのだ

「魔力値って?」

その強い基準がわからない椿

「魔力値はトーナメントに参加する資格があるかを測るもので、5000以上で参加できるの、5000ならこの国の隊長になれるわ…三万は普通に部隊長以上」

椿は飛影が垂れ流しの魔力で測ったことは知らず、国を滅ぼした飛影が二万六千で部隊長は三万ってどれだけ強いんだろうと軽く想像してしまう

「ちなみに私は一万、シュガーは五万よ」

「強っ!!?」

飛影の二倍である

あの飛影の二倍の強さなんだと椿はシュガーを軽く尊敬する

「今回の大会の…最高が…十万!!?」

スノウは一番上に記載されている魔力値を見て驚愕してしまう

過去最高である

「そういえば…飛影という方の称号の魔王ってなに?」

今度はスノウの疑問

何か強そうな称号のため気になったのだ

「私もわからないよ」

飛影から魔王という言葉聞いたことがない椿

「…」

椿とスノウはわからないがシュガーだけは知っていた

魔法使いの王

魔法使いの頂点

(…まさかな)

たったの魔力値二万六千の七歳の子供にできる称号ではない

「椿…一緒にトーナメントを観戦しましょう!？」

「いいよ!!」

スノウとしては初めての友達との記念であり

椿としても飛影が無茶しないように見張っていたいし、初めての友達からの誘いを断るなどの選択肢はない

「じゃあ…私、お父様を説得して椿が城に入れるようにしてくるね!!」

一分一秒が勿体無いとスノウは意気揚々と父親の説得をするために走り去る

「…」

あまりの行動力にポカンとしてしまう椿

「スノウ姫は椿様のようなご友人ができて嬉しいのですよ」

「私も嬉しい!!」

柔らかに微笑むシュガーと椿

二分後

説得というよりも

お父様!! 私に友達ができました!! 城に滞在させてください

なに!!? それは良いことだ許す!!

と一言二言のの会話で終了した

国も王族もおおらかであった

友人（後書き）

とりあえず…

次はトーナメントです！！

二年経ち、本を三日三晩寝ずに読んだ飛影の変化です

ちなみに最初にネタバレをするとトーナメントの出場者に飛影と静紅のコンビより強いのはいないです

過去最高10万？

飛影と静紅は桁が違います

初戦は魔術（前書き）

あゝ更新が遅くて申し訳ありません。
仕事をもっさり…

初戦は魔術

へさあ始まります！！全28組のコンビたち、この中で一番強いのはどのコンビか！！？>

出場者である28組

総勢56名の参加者達が大きなリングの上に集まっている

とりわけ目立つのが、10歳もいかない子供二人である

一人は微笑みながら余裕の表情

一人は暇そうに突っ立っていた

へ優勝したコンビには賞品としてデスパラシリーズのナイフと賞金として5,000万Gが授与されます。皆さん頑張ってください！初戦はオト国のレミとソラVS最年少コンビの飛影と静紅です。他の参加者は控え室にお戻りください>

平均魔力値は

飛影と静紅は二万八千

レミとソラは三万

ほぼ互角の魔力値

初戦からレベルが高いと観客の熱気もでてくる

飛影達の相手は男女の双子である

歳は20歳程

レミが女でソラが男だ

飛影と静紅の外見に少し余裕の表情を見せる

だがそれ以上に飛影と静紅の二人には緊張感が無かった

「飛影君殺しちゃダメよ」

「俺はお前のが心配だ」

「やあねえ…私は節度あるわよ」

「節度ねえ…信じられないな」

冷ややかな視線を向ける飛影

「それより饒舌になったわね…」

いつもより饒舌に話す飛影

「今まで言葉を知らなかったからな…」

飛影の今までの言葉の覚えかたは全て盗賊が話していたことを覚えていただけである

この三日間で辞書を丸々一冊に小説や図鑑など大体のジャンルは総なめした飛影

必然的に使える言葉が増えたのだ

〈それでは…第一戦開始!!!〉

そんなこんなで開始された第一戦

レミは杖をソラは根を構える

「あゝ心配だわ…飛影君殺しちゃほんとにダメよ!! 飛影君すぐ暴走するんだから」

「その心配は皆無だ」

飛影も静紅も構えようとはしない

それどころか飛影はそのまま普通に歩いて接近する

あまりにも警戒の色を見せない飛影にレミとソラは逆に警戒する

「なんか二年前から、楽しくなくなった」

「風よ…彼のモノを吹き飛ばせ、エアロショット」

ソラが詠唱という式を紡ぐ

魔法ではなく魔術

風が球状に固まり飛影へと放たれる

「…なんだこれ？」

初めて見る攻撃に飛影は回避することすらせずにまともに食らう

飛影の身体に当たると同時に風の球が破裂し飛影を吹き飛ばす

静紅の側まで吹き飛ばされた飛影

へソラ選手の魔術が炸裂う！！飛影選手はまともに食らってしまったあ！！！

ソラが放った魔術のエアロショットはまともに食らえば大の男でも気絶する代物である

魔力値が高いがまだ幼い子供の飛影がまともに食らったのだ
確実に気絶する

「…魔術？」

しかし飛影はダメージを受けていないように起き上がる

へなんと起き上がったあ！！なんなんだこの子供はあ！！？

コートに当たったため魔力を開放せずともダメージは無い

（手加減しすぎたか？）

いかに魔力値が高かろうと無傷はありえない

今の状況を自分が手加減しすぎたからだと判断するソラ

「魔術ってなんだ？」

「えーと簡単に言えば…魔法の劣化品♪式を紡ぐことで誰でも努力すれば使える魔法もどきね…誰でも手が出せるから種類はかなり多いわ」

「へ…：気になるな」

飛影はニヤリと笑う

「あと飛影君…このリングからでも敗けだから気を付けてね」

「わかった…三分だけ遊んでくるから手を出すなよ…」

飛影は静紅の返答を聞く前にコートを脱いで静紅に渡し、魔剣を抜く

再び刀を力なく地面に擦りながら歩いて接近する飛影

今度は先程と違い武器を持っている飛影にソラとレミは同時に接近する

双子だけに息のあったコンビネーションで杖と根で飛影に乱れ付きを放つ

手数的に防ぐこともできず180度の壁である

後ろに逃げることにしかできず逃げたら魔術攻撃が放たれるレミとソラの必勝パターン

「なあ魔術使えよ」

しかし飛影は消えていてレミとソラの背後に悠々と立っていた

「!?!?」

「この子!?!?…焼けろ…世界を焼け…フレイムタワー!!」

ソラは反転しながら根を振り回し飛影へと攻撃し、飛影が後ろに跳躍させる

その着地先

レミは式を紡ぎ大きな炎の球を放つ

炎の球は飛影が着地するより早く地面に直撃

飛影が着地すると同時に巨大な炎柱が発生して飛影を包み込む

「風よ…全てを貫く矛となれ…ジャベリン!!」

一切の手加減はない

ソラとレミの二人ともに狙われながら、その攻撃を食らうことなく背後に現れた飛影を相手に手加減は無用であった

ソラは手に竜巻を作り出し槍のように飛影へと放つ

避ける気は無い飛影は炎柱の中で攻撃の気配を感じるが再びまともに食らう

炎柱の炎を取り込み炎の竜巻が飛影に直撃し、その幼い身体を吹き

飛ばす

勢的に確実にリングアウトである

《炎舞》

飛影の両手と両足に炎が作り出され空中で制止する

「おお…できた」

ふわふわとその場に浮く

確認するかのように両手足の炎の出力を調整して空中を移動する

「魔法…使い…だと…!!?」

「あんな子供が!!?」

ソラとレミの動揺は大きい

魔術と魔法には壁がある

決められたことしかできない魔術では、無限の可能性を秘める魔法に勝てる見込みは無い

飛影は静紅の元まで移動する

「三分ね」

「三分だな」

ちょうど三分が経過した

飛影の我儘が終了して静紅が戦える時間になった

「どうやって倒しましょうか？」

「普通に殺さないように」

ニヤリと笑う飛影

「目標タイムは？」

「…10秒」

「ふふ…」

『風よ…全てを貫く矛となれ…ジャベリン』

『焼ける…世界を焼け…フレイムタワー』

飛影とソラ

静紅とレミが同時に式を紡ぐ

風と風

炎と炎がぶつかり合う

威力は互角

定められた威力しか発揮できない魔術なら当たり前のことだが、何よりも式を真似られたことがソラとレミには驚愕すべきことであった

式は十人十色

各々の感覚で自分だけがイメージしやすいようにと式を紡ぐ

それが一度聞いただけの自分たちよりも二分の一も生きていない子供に完璧に真似られたのだ

「んゝやっぱり弱いな」

「しょばいわね」

二人が見て聞いただけの魔術を発動した感想

魔法使いの二人にとって魔術はそれほど面白いものではない

掛け算ができるのに足し算を行っているような気分である

つまりは無駄が多い

次の瞬間二人はレミとソラを囲むように移動していた

「圧殺!!」

「殺しちゃまずいんじゃないのか?」

二人が行ったことは簡単で手突き出すだけ

ただそれだけの動作で衝撃波が生まれ二人を押し潰す

「やはりつまらんな…」

あまりにも弱すぎる

アギトや静紅と殺しあった飛影にとって高揚感はまるでない

「良いこと思い付いたわ…飛影君技名とか考えてみたら？」

「技名？」

二人して

飛影君が殺しちゃいそう

馬鹿が馬鹿をやる

と恐ろしく手加減しあった結果、気絶まではいかず打ち身程度の怪我でありまだまだやれる

「そう…技名…今のジャベリン！！とかフレイムタワーとかそんな感じの技名」

しかし怯んだのは事実でその間に攻撃すればすぐに飛影と静紅の勝ち決定していた

だが二人は緊張感が無い

次元が違う

そのことをようやく認識したソラとレミは全魔力を開放

次の試合のことなど考えていなかった

「技名があると格好いいじゃない？」

「ん」

だが二人は気にも止めない

《炎舞・狐火》

飛影の初めての技名

即興で本当にてきとうに思い付いた図鑑で見た狐の姿を炎で顕現する

大きさは子狐程度の大きさ

『!?!?』

可愛らしいが何か危険

それを感じとることができた二人

後ろに跳躍して手を繋いで式を紡ぐ

『始まりの風、終わりの炎…風の役は切断、炎の役は炎上…全てを断ち切る刃となれ…ソウルエッジ』

レミとソラ

二人が繋いでいる手に巨大な炎の刃が形成される

「走れ…」

炎であるが四足獣のように身体を縮め弾丸以上の速度で突進

同時にレミとソラは炎の刃を射出

ぶつかり合うのは一瞬

一瞬で狐火が炎の刃を弾き飛ばしレミとソラの間に着地

「そいつ自爆用」

なんとか迎撃しようとソラが根を構えた瞬間

狐火が爆発した

爆発という表現よりも圧縮されていた炎が解除され炎が爆発的に広がった

殺さないように熱を持たないその炎は身体を硬直させるだけで実害はない

『風よ：彼のモノを吹き飛ばせ、エアロショット』

飛影と静紅は同時に式を紡ぐ

やり過ぎて殺してしまう二人にとって威力が定められている魔術はつまらないが、手加減する意味では都合が良かった

風の球がレミとソラに放たれ身体に当たると同時に風の球が破裂し
二人を吹き飛ばす

「がっ!!?」

「うっ!!」

成す術も無く吹き飛ばされリングアウト

「手加減するには便利だな」

「そうねえ…殺してしまわないようにするにはちょうどいいわね」

〈圧勝お!!この子供二人、蓋を開けると全く相手を寄せ付けず圧
勝しましたあ!!末恐ろしい子供達だあ!!〉

「はい、飛影君」

静紅は片手を揚げる

ハイタッチである

「?」

しかし少しは言葉がわかるようになった飛影だがハイタッチは知ら
なかった

「これはね…勝利した時に行う儀式よ」

「意味がわからない」

「手を合わせるだけよ、えい」

静紅は飛影の手を掴むと無理矢理ハイタッチする

「とりあえず理解した」

場内が湧いてるがあくまでもマイペースな飛影と静紅

「今日中にもう一試合あるそうだから、そこら辺ぶらぶらしまし
よう」

「面倒…本を読んでるから勝手にしてろ」

「ひどい!!!?!」

初戦は魔術（後書き）

タイトル

初戦は魔術との戦いと

所詮魔術だった

と二つの意味がありますけど
つまらなくてすいません

進化と成長（前書き）

更新がまじでスイマセン（；つд、）
追いつかない…追いつかない…

進化と成長

結局のところ控え室にて飛影と静紅は本を読んで過ごしていた

「子供っぽく戦わない？」

静紅のいきなりの提案

試合に呼ばれて控え室からリングまでの道中のことである

「つまり、簡単に言えば私達は所謂子供じゃない？…けど私達は子供らしくないから子供らしく見せましょう…ってこと」

「意味不明だ」

飛影がそう発言するのも無理は無い

本当に唐突であったのだ

「面白そうだと思ったのに」

どうやら乗ってくれない飛影に静紅は肩を落とす

「確実にお前頭馬鹿だな」

「飛影君酷いわ」

ヨヨヨと袖で目元を隠し泣いた振りをする静紅

「くだらん」

はぁ…と小馬鹿にしたような飛影の溜め息

そして歓声が鳴り響くリングへと入場する

二戦目の相手は戦えるとは思えない病弱そうな肌の色が悪い15歳程の少女と傭兵のように胸当てや腕など所々に鎧を身に付けた男である

へさぁ…今回のバトルは強すぎる子供達…飛影選手と静紅選手VS一人だけで勝った傭兵スザクと悠々と見学していた病弱少女ステラの戦いだぁ!! 平均魔力値は二万八千と四万です!! しかし前回の試合で魔力差で僅かに負けていましたが圧勝した飛影選手と静紅選手がいるためどちらが勝つかはわかりません!!! ヲ

飛影と静紅の相手であるスザクは武器は持っていない

手甲に包まれた自らの拳が武器である

「…雨が降りそうだ」

しかし飛影は興味無さげに空を見ている

「雨…あらほんと雨雲が凄いわね」

やはりどこまでも緊張感がない二人

「先に言っておくが戦うのは俺一人だ…こいつはすぐにリングアウトするから攻撃しないでほしい」

スザクの提案

ステラは戦うことはできず、病気を治すための手術代を払うためにこの大会に参加している

スザクが一人で戦い優勝するつもりである

「べつにいいわよ？あくまでも私達は戦う人を倒すだけだから」

微笑む静紅

倒すのが一人ですむなら楽で助かるのだ

飛影はまだ空を見ている

雲の動きが早く雨が降り始めるのも時間の問題である

空を睨む飛影

〈試合開始！！〉

試合開始が宣言されると同時にステラはリングから出る

「さあて…やろうか！！？ガキだからって手加減はしねえぞ！！」

開幕魔力を解放するスザク

「あらあら？」

「…へえ」

全魔力を解放したスザクは垂れ流し状態の飛影や静紅の二倍以上の

魔力である

微笑む静紅と笑う飛影

余裕は消えない

「実力差がわかるんだったら棄権しろよ…弱いものいじめは苦手なんだ」

余裕を見せてる飛影と静紅

スザクからすれば感じる魔力量からして敵では無い

「…舐めてるのか？」

スザクの言葉は飛影に喧嘩を売るには充分なものである

「ど〜ど〜!!」

危険を察知した静紅は飛影の頭を地面に無理矢理叩きつけて動きを封じ込める

「っ!!!」

「落ち着いてね飛影君…」

静紅は笑顔のままだが飛影が起き上がろうとしてもびくともしない

「良いこと教えあげるわ」

「あ?」

静紅はそのまま飛影の耳に顔を近付けてボソボソと呟く

静紅は呟き終わると立ち上がる

「…あら？あなた優しいのね…待っててくれたんだ」

「なんだ？喧嘩か？…ガキが喧嘩するもんじゃねえ」

「あなた…意外と優しい人間ね…でも、加減はしないでね？負けた時の言い訳に使われたら面倒だから」

妖艶な笑みを浮かべる

「ああ？」

「それじゃ…頑張ってね、飛影君」

静紅は一步退くと同時に飛影が起き上がる

「これ…頼む」

飛影は再びコートを脱いで静紅に渡し眼を閉じて魔力を解放する

蛇口を少しずつ少しずつ捻るように

魔力を解放する

今までに行ったことが無い魔力のコントロール

「ん!？」

最初に違和感を感じたのはスザクであった

自分の全開の魔力に近づいてきている

「こんな感じか…」

眼を開けた飛影

全くの互角の魔力量

今までは垂れ流しか全開しか魔力操作をしていなかった飛影

初めて相手の魔力量に合わせた

「…なるほど」

ゾクリと背筋が震えた飛影

相手と同じ魔力量

今までのように戦いにならなかったものとは違う

「これは面白い」

約二年ぶりの緊張感

「こっちは別の意味で愉快だ」

格下の子供と考えていたスザク

飛影の余裕の表情

そして対峙してわかった威圧感

どちらをとっても自分よりも遥かに上の実力者だと感じ取れた

〈互いに動きません！！緊迫した睨み合いが続きます〉

静紅はリングに座ってお茶を飲んでいた

手出しをするつもりはない

一対一の勝負

「改めて名乗ろうか…スザクだ…傭兵スザク」

「飛影だ…魔王飛影」

「魔王…かよ」

幼い子供が名乗るにはおかしな称号

普段ならスザクも笑い飛ばしていただろうが、対峙したスザクにと
ってはそれは冗談でもなんでもない

信じるに値する

信じなければならぬ程の称号である

「行くぜえ!!」

「来い」

《アシッド》

《炎舞》

二人は同時に魔法を発動

スザクの右手には水の塊が

飛影の右手には炎の塊が作り出される

接近し合い同時に拳を放つ

水が沸騰し炎が鎮火され拳がぶつかり合う

「ぐう…!!?」

「はは!!」

全くの互角

しかしスザクは歯を食い縛り飛影は笑った

手甲をつけているにも関わらず互角

スザクはすぐさま蹴りを放つ

「面白い!!」

それを見た飛影も同じく蹴りを放ちぶつかり合う

体重で勝っていたスザクの蹴りが飛影を吹き飛ばす

《アシッド・ウィップ》

その手に水の鞭が形成され飛影を追撃する

「ふん…」

予測不能な変幻自在の軌道で襲ってくる鞭を飛影は殴り落とす

ジュウと何かが焼ける音と変な臭いと僅かな痛みが飛影を襲う

「なんだ？」

「俺のはただの水じゃねえ…酸だ…触れると溶けるぜ」

鞭から一滴の酸が滴りリングを溶かす

「なるほど、理解した」

「距離を詰めたら危ないからな…まだまだ行くぜ!!」

《アシッド・ウィップ ver ダブル》

両手に鞭が形成

同時に二方向から攻める

《炎舞・掌》

飛影の両手を炎が包む

人間の眼の特性上絶対に追えない軌道で放たれる鞭を飛影は打ち落とす

しかし蒸発まではいかず少し蒸発してもすぐさま復元される

《アシッド・水鉄砲》

打ち落としている飛影にスザクは追撃する

背後に巨大な酸の塊が出現した

巨大な塊から小さな針の形をした酸が射出され飛影に襲い掛かる

「ちい…!!」

《炎舞・炎球》

飛影は後退しながら魔法を構築

全て焼失させようと口から緑色の炎の大玉を放つ

「甘い!!」

巧みな操作でスザクは炎の軌道線から離れて鞭を飛影に直撃させる

「ぐっ!!?」

吹き飛ばされる飛影

《炎舞・昇揚》

両手足に炎を作り出しバーニアの要領で制止

リングアウトを免れる

（やっぱり予想通りね…）

静紅はお茶をすすりながらその様子を見ている

飛影は戦闘経験はたったの三回

静紅

アギト

そして今回のスザク

他のは戦いではなく虐殺である

つまり飛影は恐ろしく戦闘経験がない

同じ実力にすると戦闘経験に勝るスザクが押している

これからを生き残るには経験は何よりも必要なものである

静紅はもしかしたらという程度でためしに行っていたが静紅の予想が当たった

（飛影君にとっては良い経験…もし負けても私がいるし）

「あははは！！お前：強いな！！」

楽しそうに笑う飛影

（だから今は楽しんで戦いなさい）

静紅は懷から煎餅を取り出し再びお茶をすする

飛影は速度に任せてスザクに接近

「軌道が単純すぎるぜ！！」

飛影の一撃は片手で弾かれた

その瞬間背筋が凍った

「っ！！」

飛影が後ろに跳躍する前にがら空きになった胴体に酸を纏った一撃が直撃する

《炎舞・防御》

「ぐっ！！？」

酸を無効化するために咄嗟に炎を生成

しかし咄嗟にであったため充分な魔力を込めることができず完全に酸を無効化できずに飛影は吹き飛ばされる

その方向は静紅がお茶をすすっている所であつた

「あら」

静紅は片手で飛影を受け止める

「飛影君…攻めすぎよ…まずは受けに回って相手の動きをよく観察すること」

「わかった」

攻撃が直撃した飛影の腹は焼けただれているが戦えないほどではない

飛影は静紅からある程度距離を放すと腕を下ろし自然体になる

飛影はまだまだ子供であり、発展途上

強くなるのはこれからである

スザクは両手足に酸を纏うと飛影に接近

様子見と速度と連射を意識した拳を放つ

「…」

飛影はただそれをよく観察して避ける

反撃は一切行わない

腕は下ろしたままで回避する

「ふっ！」

スザクはあらかた眼が慣れたであろう飛影へ拳から酸を射出しその後を追うように拳が襲う

少しのパターンの変化

「っ！！？」

拳が飛影の頬を掠める

更にパターンを変えてスザクは攻め続ける

酸を射出した軌道とは別の軌道で拳を放ったり

拳ではなくフェイントをいれて蹴りを放ったり

足から酸を作りリングの下を移動させ飛影へ奇襲をかけたりと

しかし飛影には最初の一発しかそれにもかすらせることしか出来なかった

惜しいところまではいけるのだがかすることすらない

五分以上スザクの一方的な展開の試合

しかし先に焦れたのはスザクであった

さっさと決めてしまおうと大振りの拳を放つ

飛影は初めて反撃にうつる

迫りくる拳を態勢を低くすることで避けて同時に距離を詰める

《炎舞・双掌》

両手に炎を纏い双掌打をスザクの胸に直撃させる

「ぐうつ!!?」

胸当ては粉々に碎けちり吹き飛ばされたがダメージは無く、吹き飛ばされながらも態勢を安定させ魔法を構築

《アシッド・キャノン》

手に魔力を集中し着地と同時に放つ

巨大な酸の塊を放つ

「わかってきた…」

飛影は避けるのではなくスザクの腕を軽く叩き向きを変える

ただそれだけで飛影に攻撃は当たらない

「常に全力の意味はないのか…」

そのまま飛影は回転し側頭部目掛け裏拳を放つ

「くっ!!!?」

後ろに倒れこむように反ることで回避するスザクは倒れながらも飛影へ前蹴りを放つ

飛影はそれをわかっていたように足で蹴りを流す

「身体的全体的な動きと魔力の流れで先を予測…最小限の動きで対応…生じさせた隙を叩く」

飛影の拳が打ち下ろされスザクの顔面を捉える

「がっ!!!?」

地面に身体が叩きつけられリングにヒビを入れる

《アシッド・レイン》

しかしまだ終わらない

《完全領域》

スザクは残りの全魔力を使って魔法を構築

「…雨…か？」

リングだけを被うように雲が出現し雨が降り始めた

「っ!!」

《炎舞・防御》

雨に当たり鋭い痛みを感じた飛影はすぐに炎を纏う

静紅はそれよりも早く魔法を展開していた

「俺に酸は効かないからな…」

ゆっくりと起き上がるスザク

雨がリングを溶かし始める

「ここは…俺の領域だ…そう簡単にはやらせん!!」

雨が流れを変える

「っ!!!?!」

無数の雨が意思を持つように飛影へと襲い掛かる

《炎舞・壁》

炎の壁を発動

「甘い!!」

しかし雨はどこからでも侵入し襲う

壁とは逆方向から雨が襲う

前後左右に上からと五方向からの攻撃

壁の防御が追い付かない

「…」

諦めたかのように飛影は腕を下ろす

「うざい」

《炎舞・三步炎進》

飛影の足を炎が纏う

《一步》

地面を踏みつける

炎が爆発し周囲の雨を吹き飛ばす

《二步》

火柱が立ち上ばり酸の雨を降らせている

雲を燃やし尽くす

《三步》

最後の一步

炎の柱が立ち昇る

空高く延びて雨雲を焼失させる

「…」

咄然とするスザク

「雨は嫌いだ」

桁が違っていた

「俺の負けだ」

一番強力な魔法が打ち消されてもう手は残っていない

「良い天気だ」

>試合終了おお!!まさかの二対二の戦いが一対一になってしまったがかなり接戦した勝負でした!!勝者は飛影& a m p.; 静紅ペア
アアア!!<

空は晴れてい日の光が照らしていた

進化と成長（後書き）

飛影が雨を嫌いな理由は炎の魔法使いだからです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5315x/>

災厄の生き様

2011年11月18日03時52分発行